大和名所圖會 三

部類
冊 號
架 國
三宅氏藏書

ル 4
4095
3

大和名所圖會巻之三

添下郡　平群郡　廣瀬郡
葛下郡　忍海郡

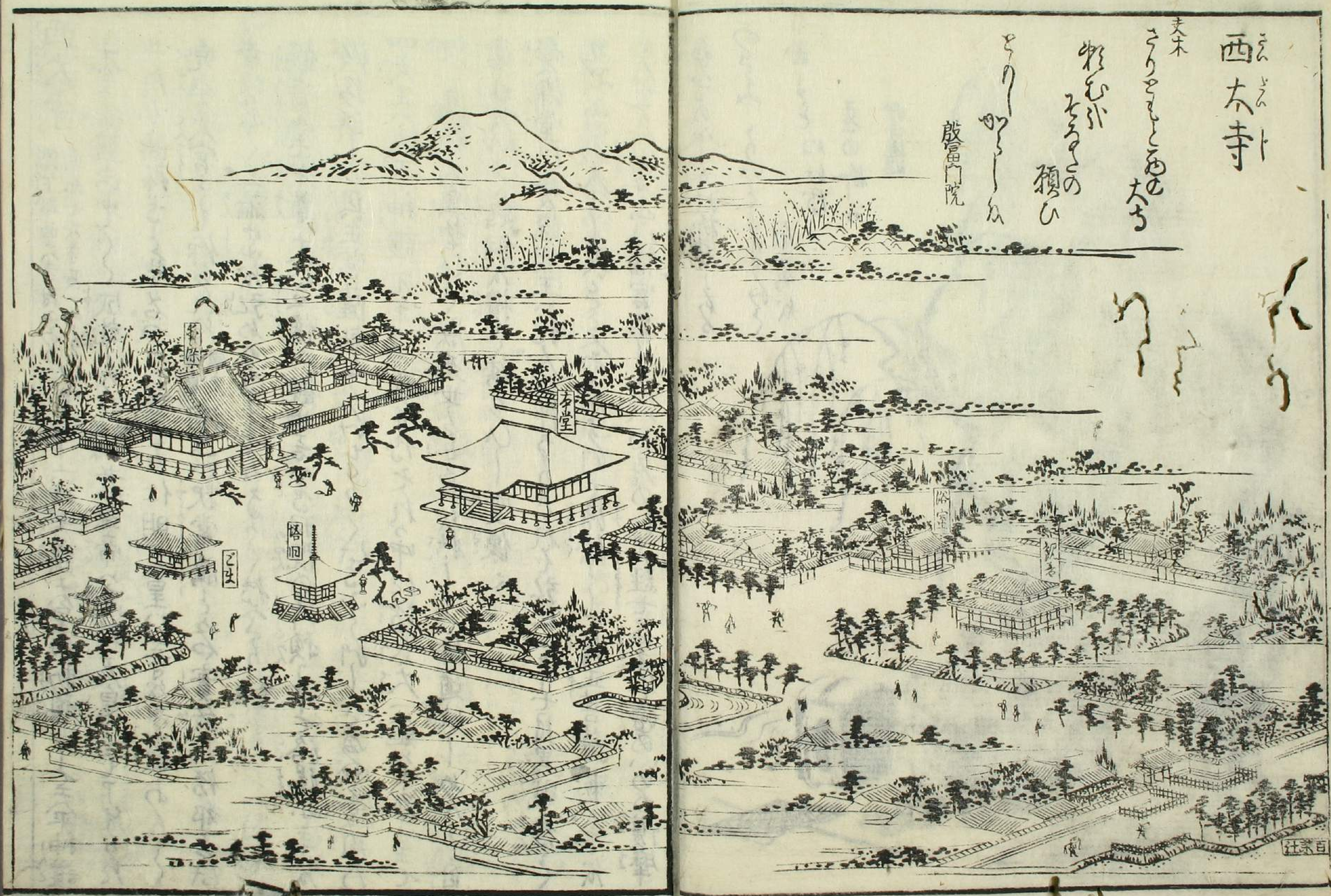
西大寺（奥院　豊心丹）　超昇寺　神功皇后陵　秋篠寺
秋篠邑　外山里　成務天皇陵　稱德天皇陵
元明天皇陵　弘法井　菅原社　垂仁天皇陵
安康天皇陵　菅原伏見　菅原寺　伏見岡
新田部親王祠　菅原池　興福尼院　赤膚山
唐招提寺（金堂　食堂　經藏　御影堂　阿弥陀堂　狐山　松　倉海波池　講堂　五層塔　羂索堂　醍醐味泉　佛舍利由緣）
薬師寺（金堂　講堂　東院　文殊堂　六層塔　佛足石碑圖）　西京八幡宮
西京　郡山城　植槻八幡宮　羅城門
薬園宮　大織冠丘　美濃山陵　大塚
大井　筒井　筒井城址　東明寺

早稲田大学図書館　36.6.21　受　藏書
門 ル4　號 4695　巻 3

金剛山寺 又大寺ともいふ　西光寺　赤檮墓　勝間田池
王龍寺　長久寺　霊仙寺 雲上窟　跡見池 弁財天社
登彌社　寶山寺 歓喜天社 役行者堂　龍王岑 十三級石塔 弥勒仏 黒滝池 石塔婆　北河越
星麥泉　巖船祠　岩船越　八幡祠
私部越　清瀧越　御櫛社　山口社
押熊祠　秋篠川　鬼取山 鶴林寺　竹林寺
阿弥陀井　福貴寺　往馬社　椋嶺越 くらがり峠
小倉岑　教弘寺　巖上社　平群社
鳴川千光寺　生駒谷 水漉石　金勝寺　雙墓
楢本社　安明寺　千塚　瓦塚
薬師井　椿井　法輪寺　舟塚
法起寺　駒墳　北岡墓 天満池　斑鳩里
三井　調子丸家池

笛吹山　粟栖小野　葛城川　笛吹社
烏志社　火雷社　角刺宮址　遊岡
笛吹池　清水　朱嬰

古今
西大寺のほとりの柳をよめる
あさみどりいとよりかけて白露を
玉にもぬける春の柳か
僧正遍昭


西大寺
夫木
さりともと西の大寺
殷富門院
本堂

西大寺　添下郡西大寺村にあり　南都七大寺其一也　人皇四十六代孝謙天皇の勅願にして天平神護
元年伽藍ことごとく成就しける　孝謙帝は高野天皇ともいへり　拾芥抄
されば高野寺とも名づけはべる　仁明天皇は此寺を崇敬ありて
兜率天宮とも作られける　類聚國史
寺に於て三論宗を弘めしめたまふ　開山は釈常騰といふ人　實敏大僧都ともいへり　釈書
観音堂　本尊丈六立像の観世音は為那院の御願にて洛陽より手を
経給ひし興正菩薩勅を受けなりしとさるにいへり　堂内に
四天王は天平神護元年に稱徳帝それが中に増長天一軀は七寸に至て
就る高野天皇誓ひて朕来世に女身を轉じて佛道成しめんと自
玉手をもて熟銅を攪て鋳たまひし霊像也
愛染堂　此愛染明王は化人の作なりされば弘仁四年七月異賊多く
九州に攻め入りし其ころ又あるによりて降伏として興正菩薩勅命を
うけ山城男山八幡宮にて八百座の仁王経七昼夜七壇のいのり護摩
のたまひければ空より絵の声あって地をうごかし修法の壇上身の毛堅くぞ覚へける
満る夜鏑矢西をさして飛び遂に大宰府将多くして異賊退治
せられければ其の夜より明王持たまふ矢うせて永く見へざりしとぞ　此記録今寺宝蔵にあり
奥院　興正菩薩の塚あり　拾芥抄西大寺貞観二年の田縁より二百七十八年を経て
叡尊二年興正菩薩中興開基せりとぞ　又は思円上人と申侍りし正安
二年興正菩薩と諡したまひ　又文應上皇興正菩薩を尊みて後
ひとく菩薩を授けたまひ　其外后妃をはじめ九万七千六百人授戒あり
正應三年八月廿五日西大寺にて入寂したまひし年九十　釈書
豊心丹　坊中にもとめらるあり　道宣律師より伝へしより豊心丹の方を得人来て
是しれ一説に畠山の何かし唐土より方を求め秘方とせられし
が西大寺の大元軍場に心のこもりしにありし此賞として豊心丹の方に三百石を
そへて寄附せられしとて畠山の記録にみえたり
超昇寺　超昇寺村にあり　平城天皇第三皇子真如法親王の御造立にて又清海
上人愛の若に建営ありし念仏堂も大正の比井戸若狭守ら兵火にて
焼亡せしが近年修造あり
神功皇后山陵　蒼山と號す　姫より中久町許にあり　土人御陵山と称し又大宮ともいふ
根廻り八十六間　隍あり　此の道あり　日本紀曰気長足姫尊　老松生茂りて　陵墓考曰高サ二十五間
に山崩を対に一百歳　狭城盾列陵に葬る　皇太后と追尊を　稚櫻宮

秋篠（あきしの）里（さと）

壬二

七夕夜の
いく夜あかしや
まちかねん
秋篠の
里に
夜
ふけ

秋篠や
外屋さへあれ
村しぐれ

凡兆

秋篠寺 秋篠村にあり 大和志社記曰本尊薬師如来ハ須弥座の傍十二神将を
光仁帝の御建立にて伽藍造立の功いまだ遂させ給ハずして
帝崩御ありしゆへ桓武帝継て造営ありて供養を遂させ給ひける
開山ハ善珠僧正也 此僧正ハ唯識を学び又心の携をも因明論に心をひ
てる眼に倦ことなかりし也 延暦十六年四月に入寂しけり 年七十 釈書

香水 寺内にあり上に祠を立て常に見ることなし むかし山城國小栗栖の常暁阿闍梨と云
あり 此人花林寺元照に大元帥の霊像秘方をうけつたへ帰朝
の後小栗栖の法林寺にて此法をおこなひしが 釈書 続日本後記 一夜この
やくし如来にこもり暁の閼伽を結びたりし此井のうちに大元明王
の影像うかみて常暁の袂にうつりてみえければ それより後七日乃
御修法ハ常暁阿闍梨をもとゝしてはじめられけるとかや 香水記 それ御修法は
濫觴ハ承和元年弘法大師宮中に真言院を建て勅許に依て
毎正月一七日をかぎりて鎮護國家五穀豊饒の祈とぞ

せられし後七日の御修法是也 続日本後紀 釈書 其後大元秘法を修せんと常暁
阿闍梨承和七年に奏聞を遂られしに則勅許あり 続日本後記 正月後
七日の御修法ハ恒例として今に絶ず紫宸殿にかざりおこなふ事と諸へ
此村諸民の家々をゆるしゆへに 毎歳正月八日より十二日まで群集を 平家物語に曰後七日の御修法ハ大元の法也
とげ 此寺今真言宗にて伏住しく三寶院に属すとやはとわかれり

八大龍王社 此寺一町余乾の方にあり雨乞の時ハ此所にて 奥福寺の府僧祈祷あり 然して旧ハ并一社あり

秋篠里 今添下郡也 類字名所集にハ平群郡とあり

玉葉
あさ日さす生駒のたけはあらはれて霧立のぼる秋篠の里　前参議実房

草根
伊駒山雲にかくれてかすむなり秋篠の里に時雨ふるらし

誹諧
わさしのくさなの白し薄月夜　支考

外山里 秋篠の西にあり 名木の槻あり

新古今
秋篠や外山の里やしぐるらん伊駒の嶽に雲のかゝれる　西行法師

旅歌大概抄曰秋篠の外山の里ハ伊駒の嶽のふもとにありとの御説云
然して外山とハ秋篠の外に続たる小山なり云々

陵圖考曰
亜仁天皇陵
字宝来山と云
寳來山

成務天皇陵　山陵村にあり　陵圖考曰高サ三十二間根廻二百七十六間　大和巡覧記曰石塚といふ辺ハ本多内記正勝郷の領し給ひし比里人石塚をほりしに石棺にあたりしかハ棺の内を開き見れハ大刀短刀鏡なとありしよし領主に訴ふ本多氏天子の陵なる事をおそれ給ひてもとのことく土を封せよと令せられ初のことく石棺をひらきたるものなし

高野陵　稱徳天皇の陵也成務陵の西にあり字を高野山といふ　陵圖考曰高サ三十八間根廻百三間

楊梅陵　眉列池の北にあり　陵圖考曰元明帝の陵として未詳　高サ十二間根廻り百八十一間

弘法井　井桁に湧溢る　超昇寺村にあり霊泉なり

菅原神社　菅原村にあり神名帳添下郡菅原神社是也　聖廟にておはしますよし或説にいへり

菅原伏見二基陵　東ハ垂仁天皇の陵西ハ安康天皇の陵といへとも　延喜式に[illegible]西ハ兵庫[illegible]

菅原伏見　菅原村ハ野見宿祢末孫土師宿祢古人土師宿祢道長なとの住し所也菅原相の遠祖也

古今　いさ爰に我世をへなん菅原や伏見の里の荒まくもおし　読人しらす

後撰　菅原や伏見の里の荒しより通ひし人の跡もたえにき

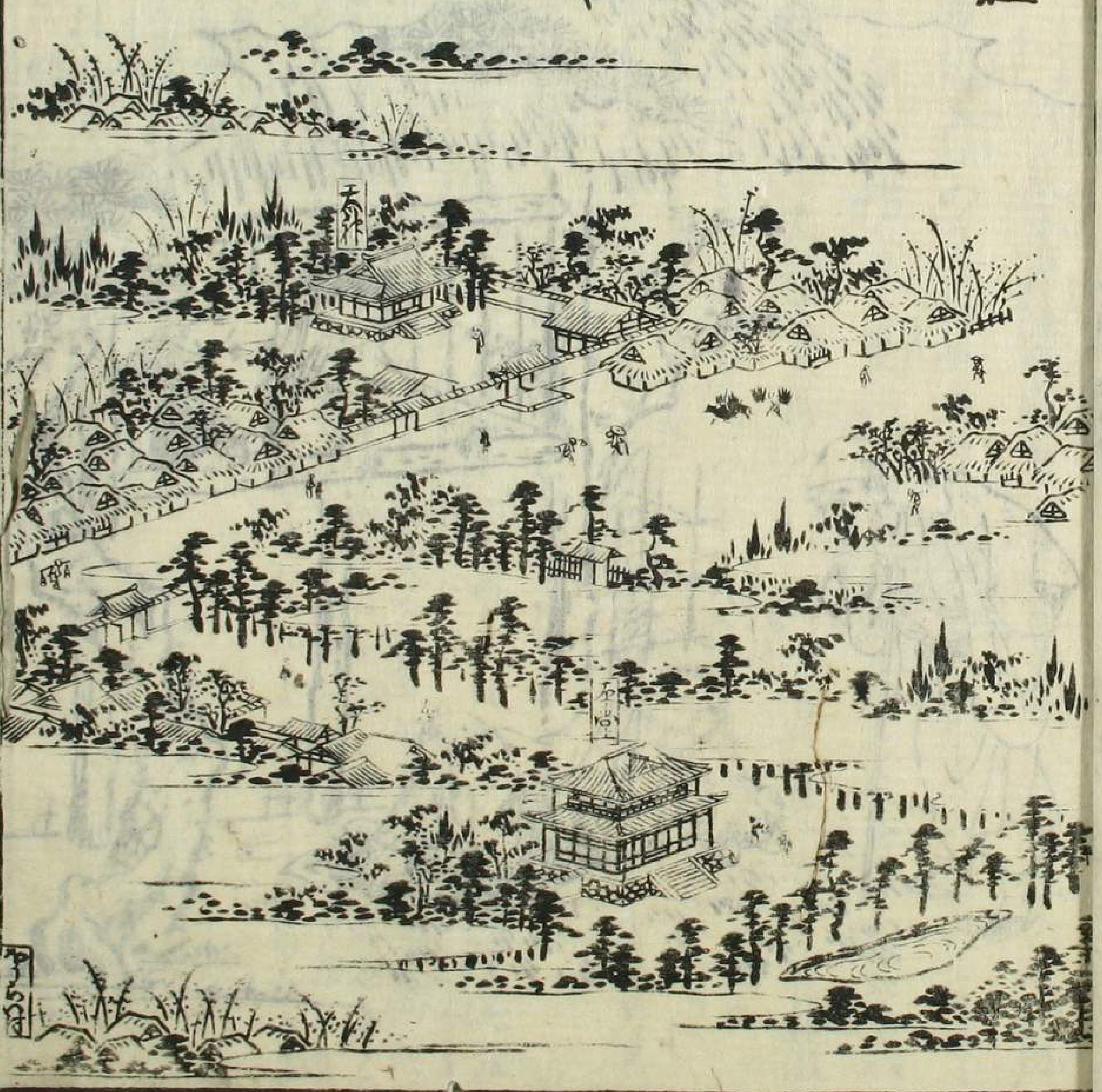
千載　なにとなく物そ悲しき菅原や伏見の里の秋の夕くれ　源俊頼

新古今　衣うつ音ハ枕に菅原や伏見の夢をいく夜残しつ　慈円

菅原天神社

菅原寺

續千載　子規なくやさつきの菅原やふしみの里の村雨のそら　定家



菅原寺 一名喜光寺 菅原村にあり 行基菩薩の建立にて本尊は長八尺座像の阿弥陀如来なり聖武帝此寺にみゆきありし時如来光を放ち給ふによりて喜光寺の勅号ありしとなん 伝へいふ行基菩薩は高志氏にて和泉国大鳥郡の人なり 天平十七年大僧正に任ず 任官行基 同元年正月大菩薩号を賜ふ同年二月二日此寺の東南院にて入寂したまふ 年八十二

新勅撰 伊駒山の麓にてとりべの跡のうけ戒の歌

法の月久しくもがなと思へどもさよふけにけり光かくしつ 大僧正行基

続後撰

かりそめの宿かる我ぞ今さらに物なおもひそ仏とぞなる 仝

伏見岡 むかし此岡にふせみ翁ありて世がたりしをもあがりにおもいて伏み枕をのみけふひろしをりろの里人伏見翁としるつけ ...おもしろひ翁に天平八年行基菩薩婆羅門僧正菩提を招かんとて詩を入りて知 旧友に異なる ... 供して二傍數ひきて着なとり柏板なるしく翁なり 其後翁入り方志し ... て伏見乃岡とやよひける

新田部親王 塚 伏見岡東麓の小丘なり里人これを祭る

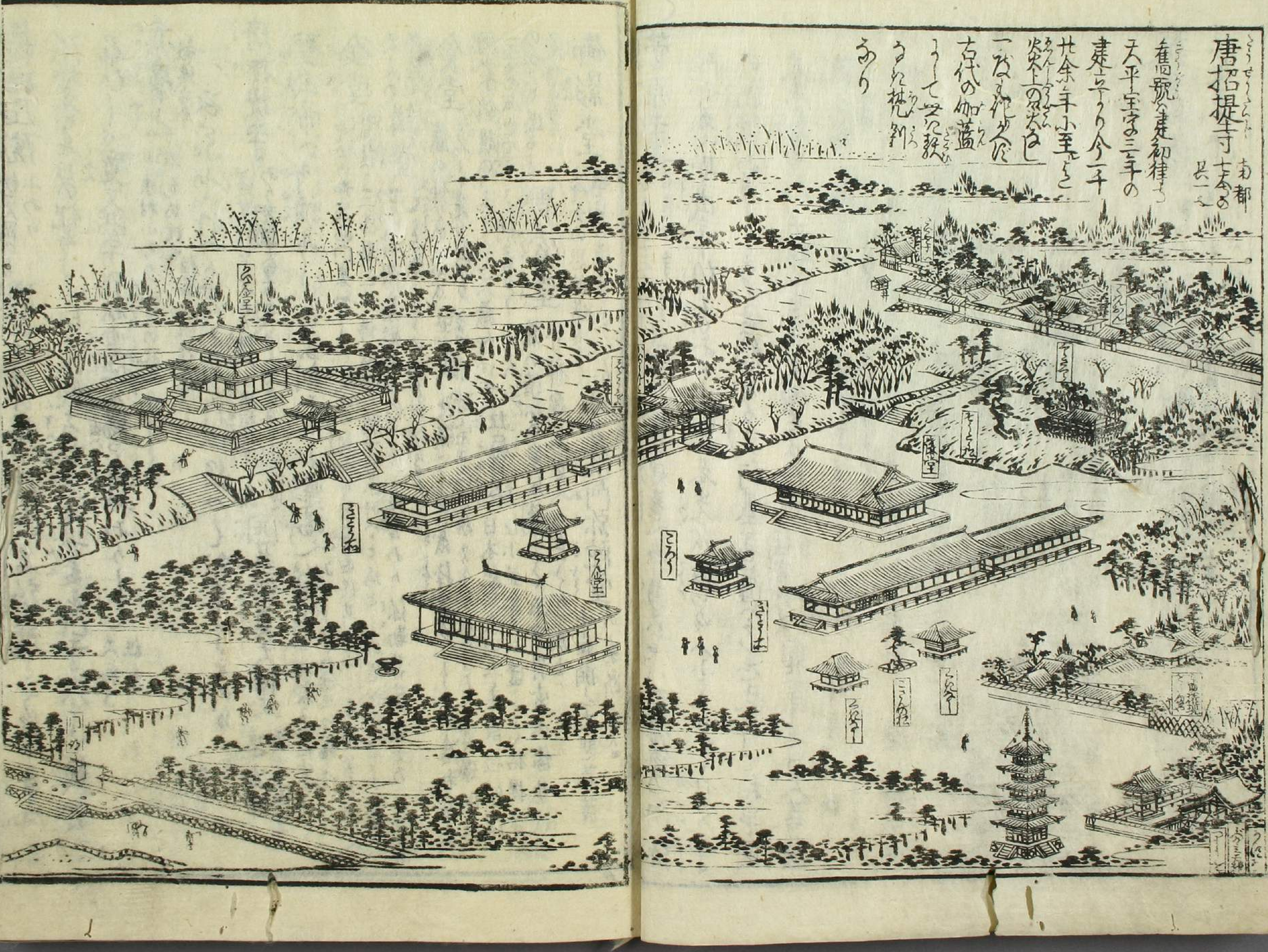
東大寺なさしろ小や 出釈

菅原池 菅原村にあり 日本紀曰推古天皇十五年 作る

南都七大寺の其一

唐招提寺

舊號は建初律寺天平宝字三年の建立なり今一千廿余年に至れども炎上の災なし一宇も欠ず古代の伽藍にして世に稀なる梵刹なり



興福院 佐保岡の南にあり 圓純法師の住し給ふ一名弘文院と号す本尊阿弥
陀如来は春日の作なり脇士に観音勢至を安置す寺久しく頽廃す
なりしが寛文五年の秋霊地を賜つて再興ありしと 大和志 社記

赤膚山 五条村にあり赤土の丸山なり
不毛の地也
新續古今 住吉大明神の御うた
夜ふかく入ける月はわかれ山に一つもかさなしとみゆ

唐招提寺 蓬莱村の南にあり楼門に唐招提寺と額あり
孝謙天皇の勅を奉て初て建立す 此地は新田部親王の旧宅なり
聖武帝の御願にして草創ありし霊場也 開基鑑真大僧正 律宗 真言兼学

金堂 本尊は如宝法門末の丈六の釈迦仏なり安置せし其中に千仏なまざまん
脇士の薬師へと思託の作なり 弥勒菩薩 脇士の二菩薩
背後に三千餘三千仏を画く脇士の薬師へと思託の作十一面観音
平城の朝集殿をうつして造営あり

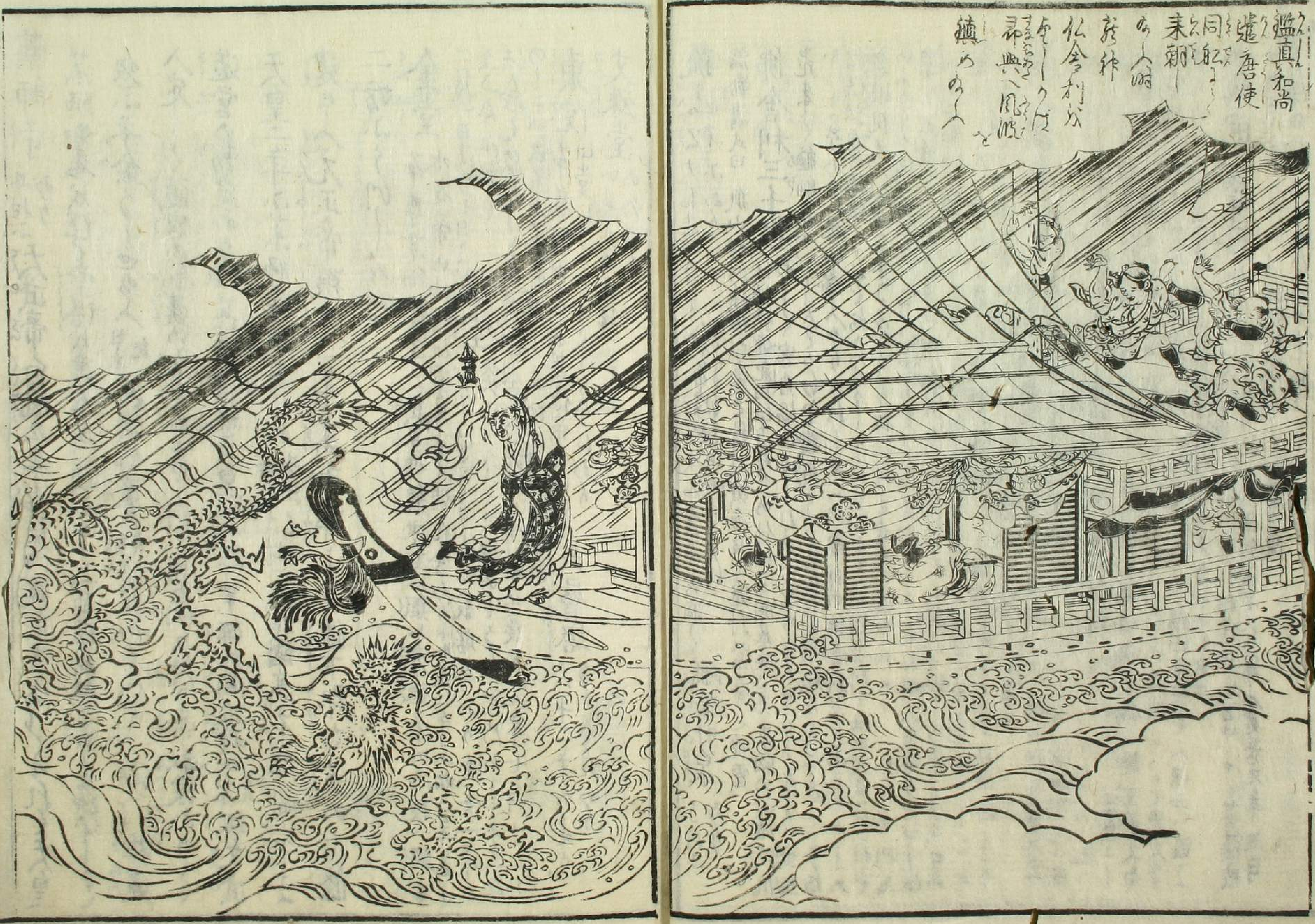
講堂 本尊は弥勒菩薩 開基の法力の作なり
新造なりし天人の

食堂 藤の仲公の家なり 経蔵 本尊は弥陀 釈迦 来迎の義静建立し仏舎利 経論
移して建られたり 珍宝を以て収めたり 賢璟法師
国家鎮護のために大蔵経に千 五層塔 日本紀曰大同五年散位江沼
二百巻を書写して納置ありしが 臣小並等を遣して招提寺
の塔に作る 造る所と 絶して不空羂索の像廿八

羂索堂 本尊は羂索 神泉をとらえんとて 釈迦
藤の清河の家を施して造る

御影堂 開基の思託造る 鑑真の遺像をとめたり 西方院阿弥陀堂の
中興開山大悲菩薩の
廟所あり

孤山松 大和志曰寺前にあり 滄海波池 大和志曰今は涸れて 醍醐味泉 寺内にあり
弥勒講式曰 孤山松間徐禮白毫之秋月滄海波上遥引紫臺之暁雲
田となれり
佛舎利三千粒 開基鑑真来朝の時海上にて鳥風
あらく客舟没溺せんとするを鑑真遥に新たにやみを
起して船舶なやみしかば是を大海に入れ鑑真の
舎利を沈めけん是は龍神の仏舎利をおもうて
仏法弘通の海難をまぬかれ是を日本に入れず舎利をもとめ
忽波風やみけり日本に来りてけり招提寺建立の後に仏舎利を
いのりて海底の宝とせんやと答へありて和尚此界の宝をむすび
真言秘法を修し定是の深秘をもつてこれを以て龍宮城の宝をもとめ
ける龍神亀と化し此池の沈水を含み舎利を捧げてあらはれ給ひけり
龍池と名づけ社を建て舎利の擁護神とし輪蓋龍王と号し時々
白海の竿の時に舎利の戸ひらき供養しぬ今は絶えてそのこん
開山鑑真和尚 唐の揚州龍興寺の智識也 唐朝玄宗帝の代天宝二年
小裁朝りて来朝のためにそのおほせをうけて日本へ渡海せしが風
波おこりて唐土へ吹もどされけり其後又海に浮ぶ波あらくして沈へ
吹つけられとも終に勝宝四年遣唐使大伴宿禰古麿がむかへに来朝し
東大寺に至り将来の仏舎利三千粒阿育王塔様銅支提止観玄義文句
菩提子三斗晋王右軍の書一巻聖武天皇に奉り其後勅によりて東大寺
戒壇院を建て又招提寺を建立し大僧都に任し僧正に任ず後に
諡られて天平宝字七年五月六日に遷化したまふ年七十七 釈書
中興開山覚盛和尚 又名窮情上人 四条院仁治年中に宮中にて菩薩戒
十九日入寂したまふ後深草院御宇大悲菩薩の号を賜ふ 建長元年 五月
と後の位をとりて

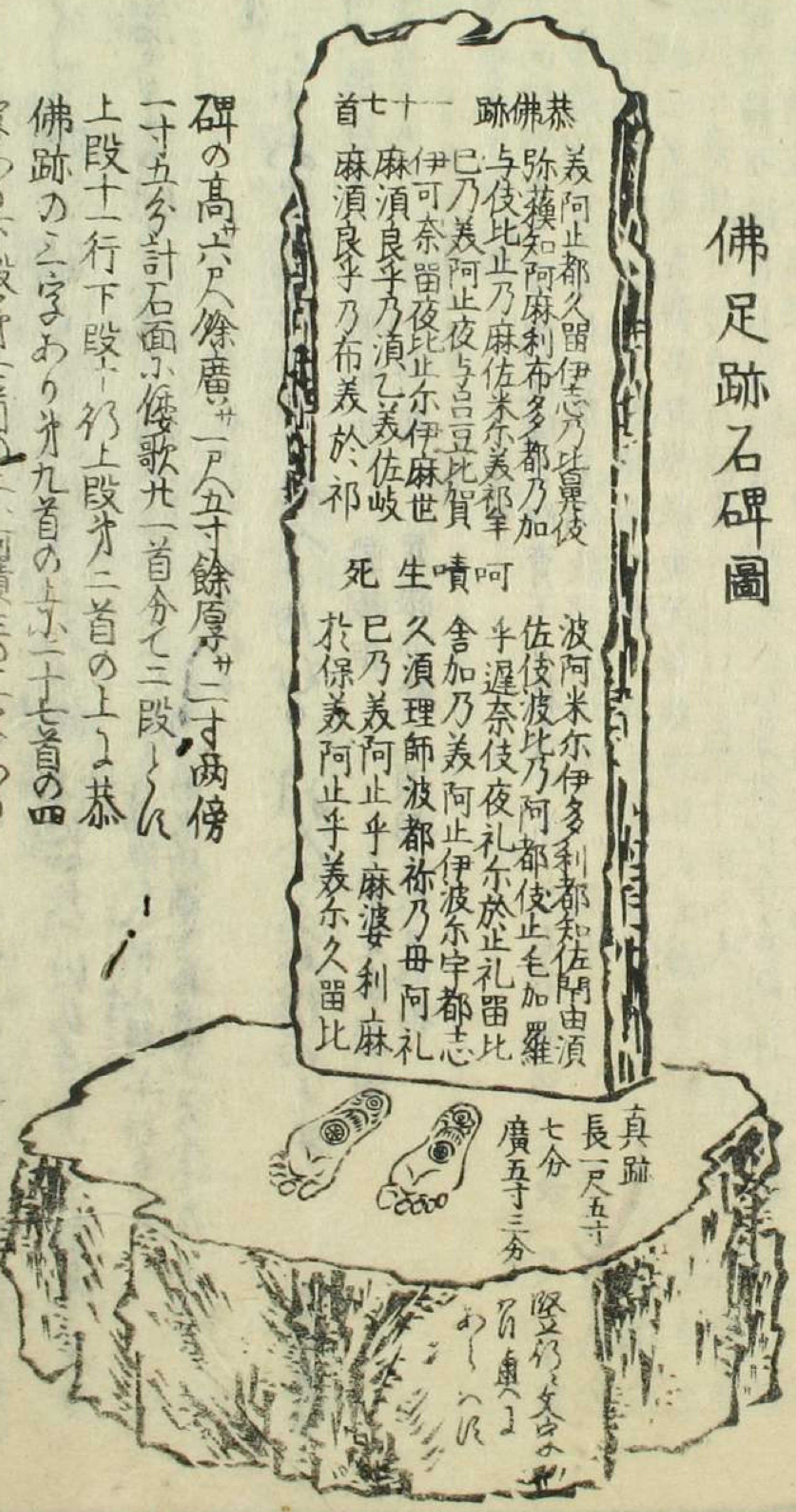

鑑真和尚
遣唐使
同船にて
来朝し
給ふ時
仏舎利を
風波を

薬師寺

薬師寺 西の京村にあり 天武帝白鳳九年皇后御疾あつしくなれば天皇
薬師如来を祈て堂塔を建んと御願ありて一百僧を供養し給ひしかど
終に平愈ましまさゞりし 日本紀 其頃伽藍の形容を知る人なし 沙門祚蓮
入定して龍宮の伽藍のさまを書うつし奏聞を経て帝叡感ありて
造営の勅定あり 釈書 其後持統天皇十一年薬師の開眼あり 日本紀 扨文武
天皇二年に薬師寺成就しぬ 続日本紀 此時は大和国高市郡岡本に
建られ、元正帝養老二年高市郡より添下郡右京の六条
二坊にうつし給ふ

金堂 本尊薬師如来十二神将 観世音二躯は孝徳帝の御願一躯は
水尾帝の御願 此堂むかしは造花会あり 嘉祥二年に始る 毎年
二月一日より七日まで むかし此堂にて 最勝会あり 文安二年に
至る今に絶ず 講堂 炎上して只礎のミ残る 慶長元年七月十二日
法会も絶果て 名のミ 西院 大地震に破壊れ 其跡に 納めらる
のこその古跡なり 東院 本尊観世音は孝徳帝の御造立 六層塔 天平二年の建立
此堂むかしのまゝ今にあり 今にあり
文殊堂 いにしへの古跡

佛足跡石碑圖



碑の高サ六尺八寸餘 廣サ一尺五寸餘 厚サ二寸両傍
一寸五分計石面に倭歌廿一首分て二段とし
上段十一行下段十行上段第二首の上より恭
佛跡の二字あり第九首の上に二十七首の四
字あり下段第七首の上に呵嘖生の三字あり
第九首の上に死字あり并十七首は佛足跡を
讃たる歌也四首は呵嘖生死を詠む歌なり
今こゝに書る文字は十七首の内十首計
の句を摘て其石碑の体相を圖にあら
はしつ

盤石高一尺八寸餘
平面縦二尺五寸
横三尺二寸五分

夫佛足石といふハ此寺の本尊薬師如来御造立の時百濟國より献りし
大聖釋迦牟尼佛の足形なり彫たる石にて此佛足形を基としるして丈六の像
を鑄たまひしとぞ　薬師寺記
又此所に竪石の碑ハ聖武帝の頌佛足石を讃したる詠
なりけるにも万葉假名にして十七首の中第二の歌ハ拾遺集に
入りて侍り光明皇后山階寺にある佛跡にかきつけられたまへり
山階寺より此寺に移しぬる由来なるべし　舊趾ハ別山科にあり　都名所圖會拾遺にくハし

拾遺　山階寺にある仏あとにかきつけ侍る
三十あまり二のすかたそなへたるむかしの人のふめるあとそこれ　光明皇后

佛足形に此文を彫付たり
千輻輪相　金剛杵相
轂輞相　足跟亦梵王頂相
具足魚鱗相　衆蠡相

釋迦牟尼佛跡圖
考西域傳云今摩掲陁國昔阿育王方精舍中有一大石有佛跡各長一尺八寸廣六寸輪相花文帯相名異是佛欲涅槃北趣拘尸南望王城足所蹈處迹為金耳國商迦王不信正法毀壞佛跡鑿已復本厩今現圖寫所在流布觀佛三昧經云若人見佛足跡恩敬重无量衆罪由共亡滅今俱〇非有幸之所致乎又北印度烏仗國東北〇二百六十里入大山有龍泉河源春夏含凍晨夕飛雪暴惡龍常雨水災如来往化令金剛神以杵撃山崖〇佛歸依於佛恐心起慈跡示之於泉南大石上現其跡随心淺深量有長短今丘慈國城北四十里寺佛堂〇中玉石之上亦有佛跡齊〇目放光道俗至時同住〇修観佛三昧經佛在世時若有衆生見佛行者及見千輻輪〇相即除千刧極重悪罪佛去世後想佛行者亦除千刧極重悪業雖不想行見佛迹者見像行者歩之〇中亦除千刧極重悪業観如来足下平満不容一毛足下千輻輪相轂輞具足魚鱗相次金剛杵相足跟亦有梵王頂相衆蠡之相不異諸悪是為休祥

文室真人浄三

大唐使人王玄策向中天竺為〇國中轉法輪〇〇同見跡得轉寫搭是第一本日本使人黄書本實向大唐國於普光寺得轉寫搭是第二本在右京四條坊禪院向禪院壇披見神跡敬轉寫搭是第三本従天平勝寶元年歳次己丑七月十五日至廿七日并一十三箇日作了檀主従三位智努王　天平勝寶四年歳次壬辰九月七日改書寫成文室真人智努書師越田安方書寫　〇扣〇智〇努〇

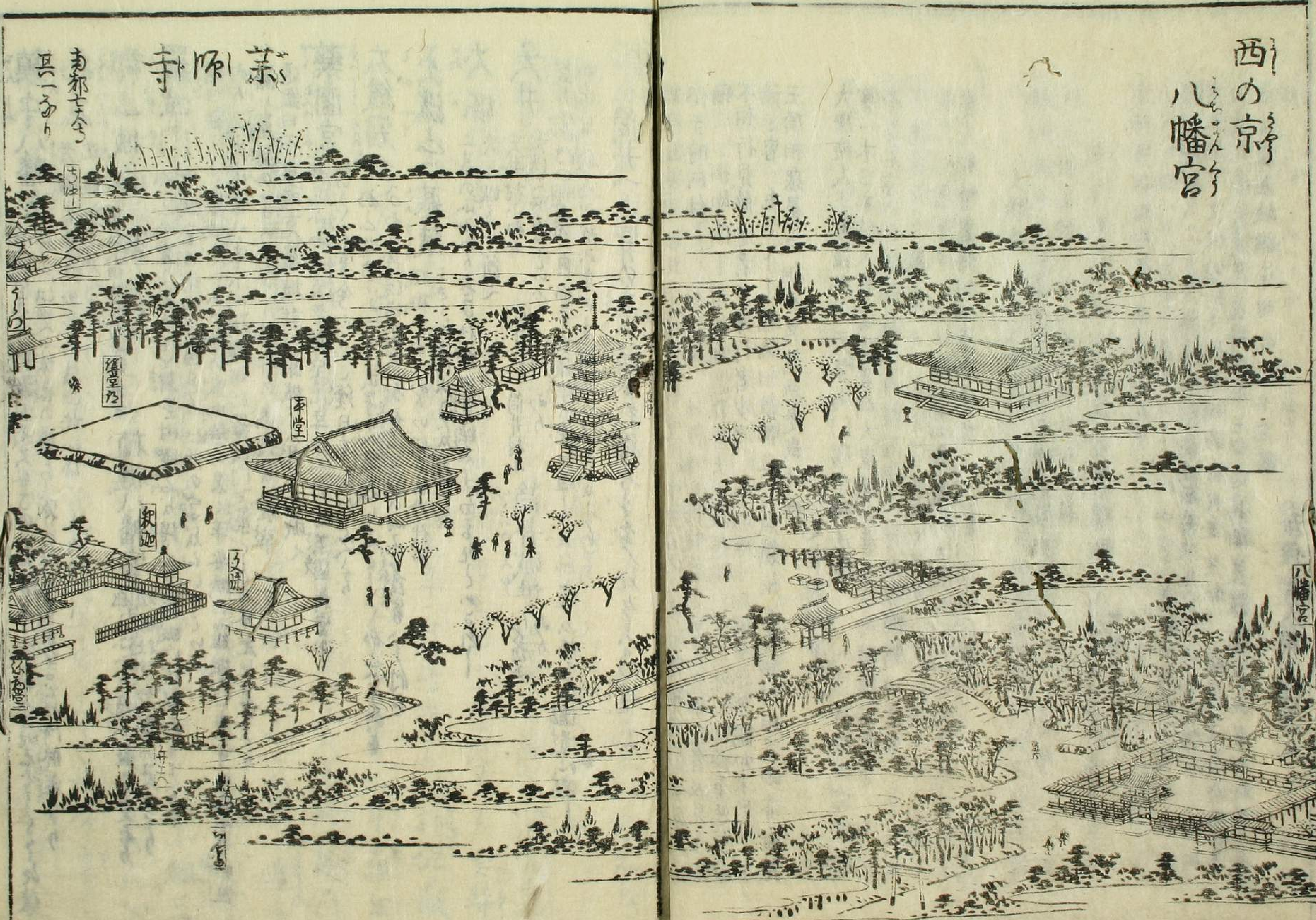
伏願為　亡夫人従四位下茨田郡王法名良式敬寫釋迦如来神跡伏願夫人之霊魂高遊入无勝之妙邦受〇之聖〇永脱有漏高證无為同霑三界共契一真

諸行无常　諸法无我　涅槃寂静

○文室真人浄三ハ天武帝皇子長親王の子なり

○東塔露盤銅柱銘　維清原宮馭宇天皇即位八年庚辰之歳建子之月以中宮不悆創此伽藍而鋪金未遂龍駕騰仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業照先皇之私誓光後帝之玄功道濟郡生業傳曠刧式於高躅敢勒貞金　其銘曰　巍巍蕩蕩薬師如来大發誓願廣運慈哀猗歟聖王仰延冥助爰餝靈宇荘嚴調御亭亭寶刹寥寥法城福崇億刧慶溢萬齢

○柞傳舎人親王題書云



西の京
八幡宮
薬師寺
南都七大寺
其一なり
本堂
釈迦
八幡宮

鎮守八幡宮 貞觀元年行教和尚大安寺の八幡宮をうつされし時志たしくきたりて神体を
納め此神体の側に今の社は豊臣秀吉公の御修造なり
孝謙天皇御出家の後此地に住給ひけるとぞ

西京 正統記に見えたり

郡山城 大和志曰小田切宮内少輔春次初て築くとぞ

植槻八幡宮 郡山にあり 傍に観音堂あり 植槻社万葉集に見えたり

羅城門 郡山の東にあり田を耕す時礎石など掘り出せり 羅城門の跡なりといふ
平城宮の南門に当れり此所の字ならいせといふ
図曰羅城といへば都の外曲輪の名也平安城の羅城門は東寺の西に今旧址
あり又天武帝八年に初めて都に羅城門を築くと日本紀に見えたり
羅は羅絡の義なるべし外郭の番兵を羅卒といふ
通鑑曰不移時克羅城 註曰羅城は外の大城也

薬園宮 郡山にあり天平勝宝元年十一月南薬園新宮に
いたり大嘗会ありと続日本紀に見えたり

大織冠丘 郡山柳町にあり其後多武峯へ大織冠をうつさしめ
るときの跡なりと伝ふ又旧事紀に都山に城の時大織冠の室へうつすを

美濃山二基陵 植槻の南にありいつの御代の
ことをしらず

大塚 二基の御陵にある子伝抄曰聖徳太子白石九しとめられし
大なる塚なりし所也

天井 天井村にあり
弘法大師の井といふ

筒井 筒井村にあり

筒井城址 同所にあり
筒井家伝曰順慶は興福寺唯識論の学に通し且神道及び儒道に熟し
和歌をよくす水旅父年の友筒井の清をなしとぞ

筒井つゝ筒井の底の清水をむすぶ人々乃暁きを

鍋倉山東明寺 矢田村の北にあり 舎人親王の建立にして本尊薬師如来なり
安置する所の紺紙銀泥の法華経あり舎人親王の真筆なりと云ふ

金剛山寺 矢田村にあり 俗に矢田寺といふ 本尊は地蔵菩薩天武天皇
の勅願開山は智通僧正なり縁起に曰く僧正の弟子明日年七月に此寺に
三蔵に唯識をまなび帰朝の後白鳳元年二月僧正より釈満米地蔵
菩薩をむかへ此所に住る満米上人といふありて其余年の星霜を
送く此地蔵菩薩を信敬し奉る其頃小野篁は上人と師檀の
ちなみありて篁はいとあやしき人にして身は朝廷にありながら魂を
焔魔王宮にかよはせける或時炎王より篁にかたりて曰く今の世の流せし
罪をしてその罪をへつゝ我方なくるしめるものをなげしく焔王
の言は菩薩戒をうけさせよるのかたしと曰は炎王そうおもふ
人人しも陰府に戒師なかりしにつき篁をよろしく我師友をもち
戒業修行の人ありと奏すると炎王その師をもよばれ則篁にいの

上人のとくふりて志かくのまゐりけるとや上人あやしさごと答ず卒兵より
㒵をせしが琰宮にいたられ則上人が師子の座にあがられしかば炎王は
みづからむけ菩薩戒をうけ給ひて後あまたの布施にはいらせ上人へ
地獄の苦報を見せんと我が袖をひかれ則炎王上人が深く引給ひしか
忽ち阿鼻城にいたられ見れば鉄門の風銅釜の焔が吹きあがり山
より剱の枝をつらね池より血の焔たちて其外さまざま苦の有様おそろし
それが中に法師ひとり焔にこがれてありけりいかなる者ぞと問ひけるに答
はてひをかしかく苦にせめらるゝといへ我は是地蔵菩薩に今の
苦にかはりてかくのごとしといへばそれより結縁の衆生をとかば
今人にたよりなし娑婆世界にかへりて我に縁をむすばしめよ
みなくの苦をまぬかれんと上人哀しく立帰りて冥使
にたのみし白米の箱一つを上人にさづけ娑婆にかへりてかの箱を
きよける白米満てこれに添ひてみたるによりて生涯いきりき

やもし釈尊は地蔵尊を造立せんとて良工をもとめけるに化人来
来りて作りけるとぞ長三尺余是本尊にて上人の乗りしは
満慶が白米を得られしより後は満米上人と称せしが本尊の脇士には
観音吉祥天あり二尊は満米上人鑑の作なり　満米上人小野篁像 堂の乾の隅にあり　天武帝御影 上ろう親王にあり
小野篁は参守の長男仁寿二年に卒を年五十七　破軍星の化身也
いへり　小野系圖

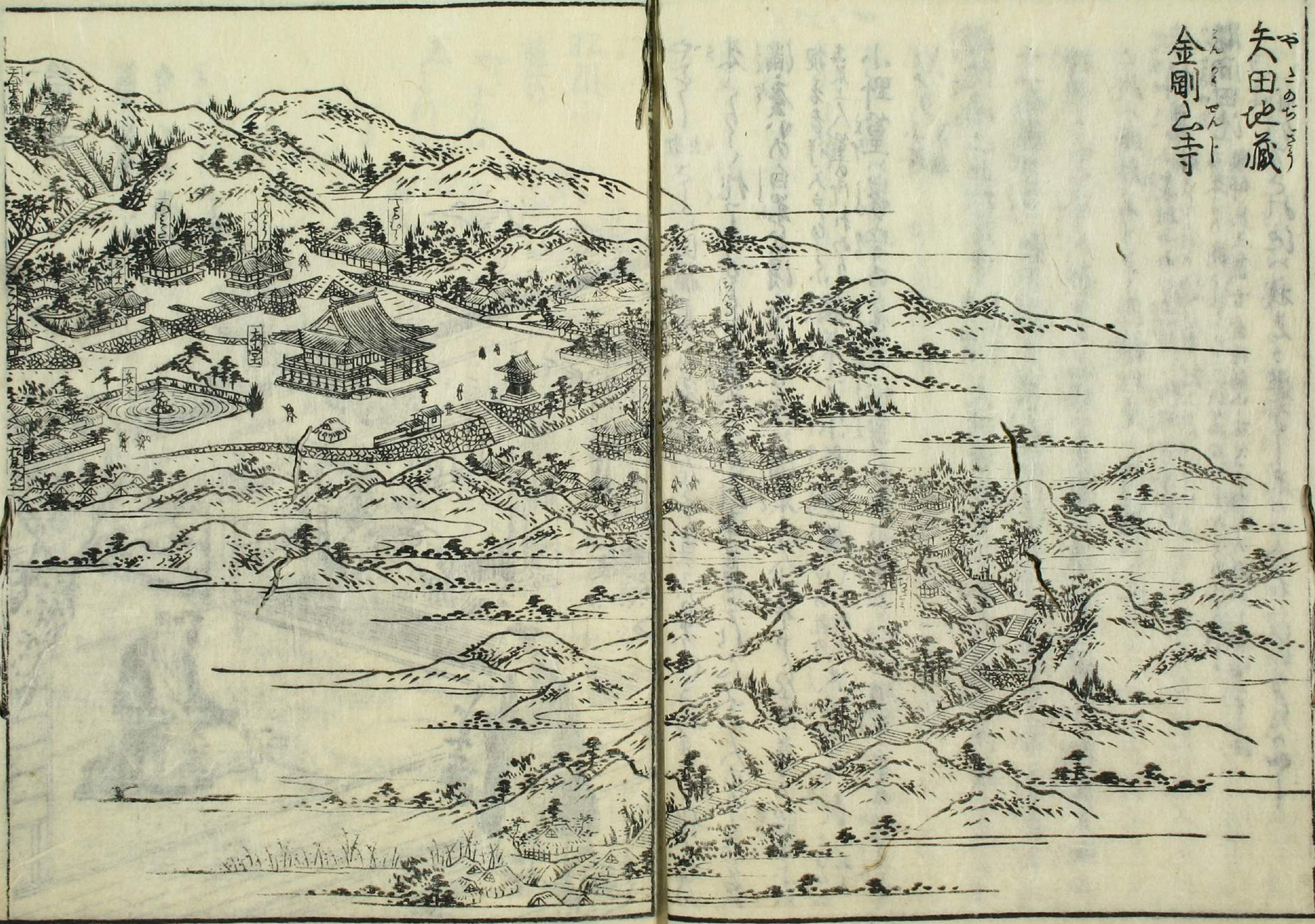
補陀洛山西松尾寺　矢田の南にあり　天武帝の皇子舎人親王の御願へ十八年の名字
十一面観世音は親王の作大黒天は弘法大師の作也足は市守長者の
持仏とかや舎人親王の石塔は本堂の後にあり鎮守は松尾大明神
これは酒神にしてくて山城松尾と御同神也

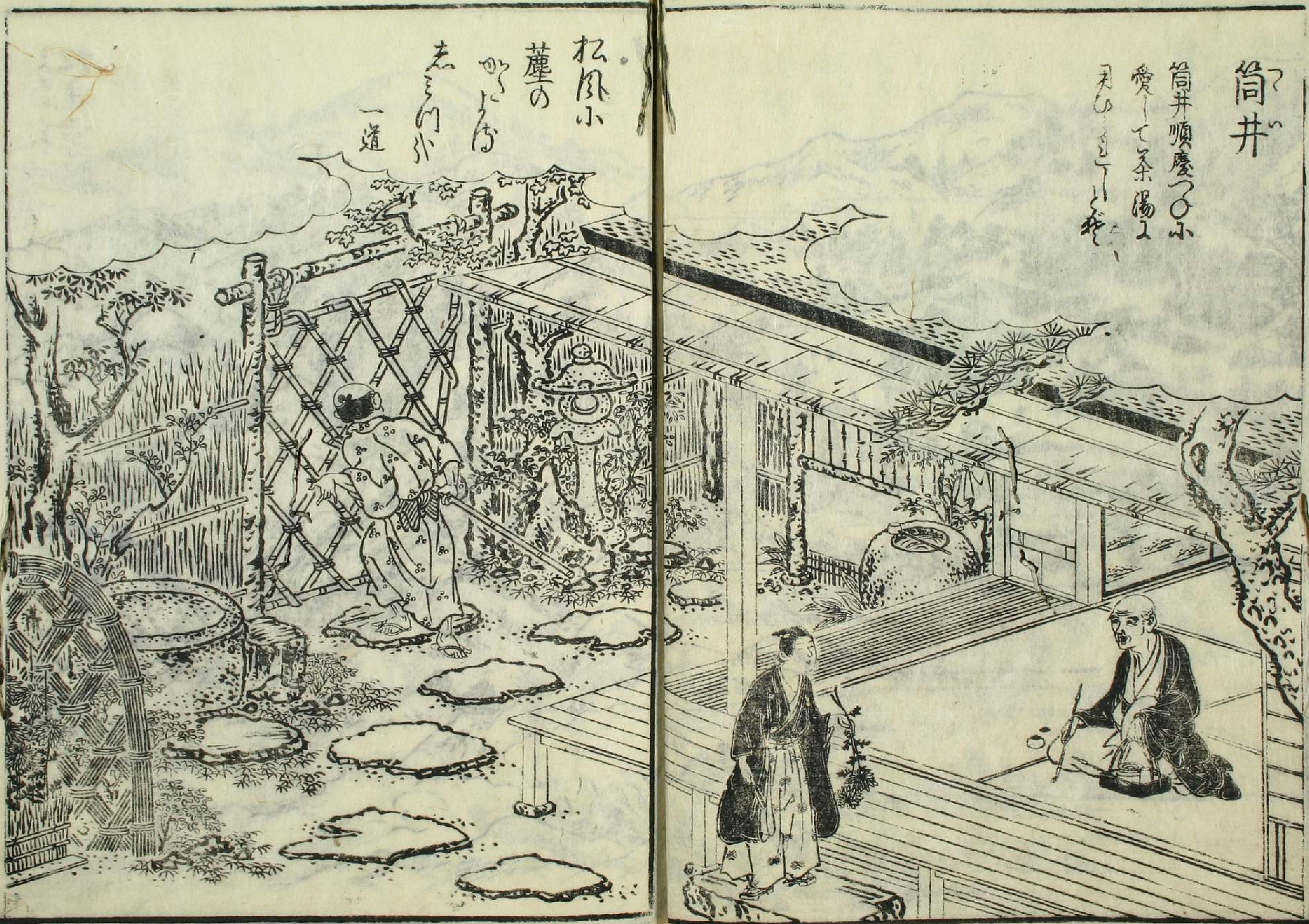
赤檮墓　小泉村にあり赤檮は物部守屋を射ころしける人と日本紀にみえたり

勝間田池　顕仲良王集 古今枕袖中抄　古来より所さだまらず茶師ちのかたよりいふべし説あり分明ならず

万葉　かつまたの池は我しる蓮なし志かいふ君がひげなきが如し

矢田地蔵(やたのぢざう)
金剛山寺(こんごうせんじ)





筒井（つゝい）
筒井順慶つねに
愛して茶湯に
用ひられしとぞ
松風に
蘆の
かゝに寄
志ミ川に
一道

まつのをてら
松尾寺
松尾

海瀧山王龍寺 二村ニあり 伽藍開基記曰和州添下郡の西ニ山あり海瀧と
いふ林壑幽邃にして松檜蔚然たり巖崖奇秀にして中ニ巨石あり
高サ一丈五尺計ニして十一面観音を鐫成し梵容麗しうしくましゝ
その尊敬をなせり左ニ不動明王の像を刻む右ニハ建武丙子三年十二月
十二日大願主僧千貫行人僧千歳と識を上ニ一宇の堂ありて是を
覆ふ又堂の傍ニ伊勢石清水春日の祠あり堂の後ニ弁財天あり
皆守護の伽藍神也村民無知ニして山林の木石を侵ときハ其家
かならず禍に罹る過を悔んで侵を所の物を還ときハ則已といへ
り山ニ瀑布泉ありこれによりて名とす 下略
真弓山長久寺 上村ニあり 大和志社記曰聖武帝の御建立にして七堂伽藍
の霊地なれども頽廃して本堂一宇本尊十一面観音塔一基大日
如来を安置す側に鎮守八王子社あり境内方二町余坊舎八宇
真言宗也

鼻高山霊仙寺 伏見園の西ニあり 行基菩薩の開基也鼻高を埋しより
山號とす又南天竺の婆羅門と行基ともに遥の霊山の
釈迦の御まへにちぎりてしの和歌より号とせり本尊ハ薬師如来
脇士十二神将を行基の作也又三層塔あり鎮守ハ十六所権現
なり行基の住給ふ室ハ本堂の西北方ニして今ニ持佛堂なり
迹見池 池田村ニあり日本紀曰垂仁天皇三十五年倭狭城池迹見池を作る
登彌神社 木嶋村ニあり迹藩六村の氏神也延喜式にのせたり
寶山寺 生駒山般若窟ハ役小角修行の霊窟也中興寶山和尚本堂 寶山の作
の中尊ハ不動明王左右ハ矜迦羅制多迦地蔵観音也
歓喜天祠 本堂の後ニあり 常念観音堂 本堂の隅ニあり 本堂坤の方上閣 本尊虚空蔵
弥勒佛 岩の隅の岩窟ニあり 辨才天大社 鎮守ハ奥より出 役行者堂 行者の洞ニあり
十三級石塔婆 岩嶺の上ニあり内ニ佛舎利及び三十佛名の経あり
それ寶山和尚ハ姓ハ山田氏勢州安濃郡一色村の人也延宝六年十月

十日始て當山般若窟に入一宿一夜修法遍身し樹下に安坐しける
夕暮に黒色の大夜叉来現し寳山を捉て曰汝何の故に我山に来住
するや寳山の眼忽に瞋て氣絶せんとせし時に不動を念じて名號
を唱へ力十倍してかくいへる者をと問へ夜叉神答ていはく逃去は
甚堅岩石般若の神に語して般若石ぬけの夜叉の肌膚に似たり是に依て
般若の来試を難ぜり一日雛の甲人来りて當山の鎮守弁財天乃像
近世山下の俗家に安置は寳山則これを移し改て祠を建延寳
八年四月朔日より五日断食し八万枚の護摩を修し本尊不動明王を
彫刻をし自弥勒の像を彫て岩窟に安ず其外宝上閣に虚空藏を
安置し観音院に観音を居られ星霜二十年に至りまして一宇
大伽藍となる初は大聖無動寺と号し後改て寳山寺といふ中古無
比の有者へ正徳元年正月十六日入寂 年八十八 本堂の額弘法大師乃筆
求得て寳山寺と改むところ 寳山寺と額を安にこれあり
和漢三才圖會に見へたり

星森泉 大和志曰南田原村にあり清水常に涌くとあり旱に涸ず霖雨に濁ず 河内國交野郡の川此水源也土人曰むかし此地に星落る因て名とす

巌船神祠 南田原村にあり 舊事記曰饒速日尊天神御祖の詔を稟て天磐船に乗て天降り河内國河上哮峯に坐す 河内志曰河上哮峯を護良郡田原村にあり今石船山と號す峡中に石あり長五丈計て溪を塞ぐ石下を通へ和州南田原石船明神の神輿こゝに遷幸す因て石船社と呼ぶ今其禮式廢しといへども毎年七月晦日村民相集つて神事を修せる

いふ神坐石交野郡に属す 諸州めぐり 貝原篤信云岩舟より入ておく谷中七八町東に行は谷の内頗廣し其中に天川なる其里を田原といふ川の東を東田原といふ大和國也西を西田原といふ河内國なりと云

龍王峯 高山村にあり峯に龍王祠あり旱には雨を禱り其驗あり 黒溝池 高山村にあり

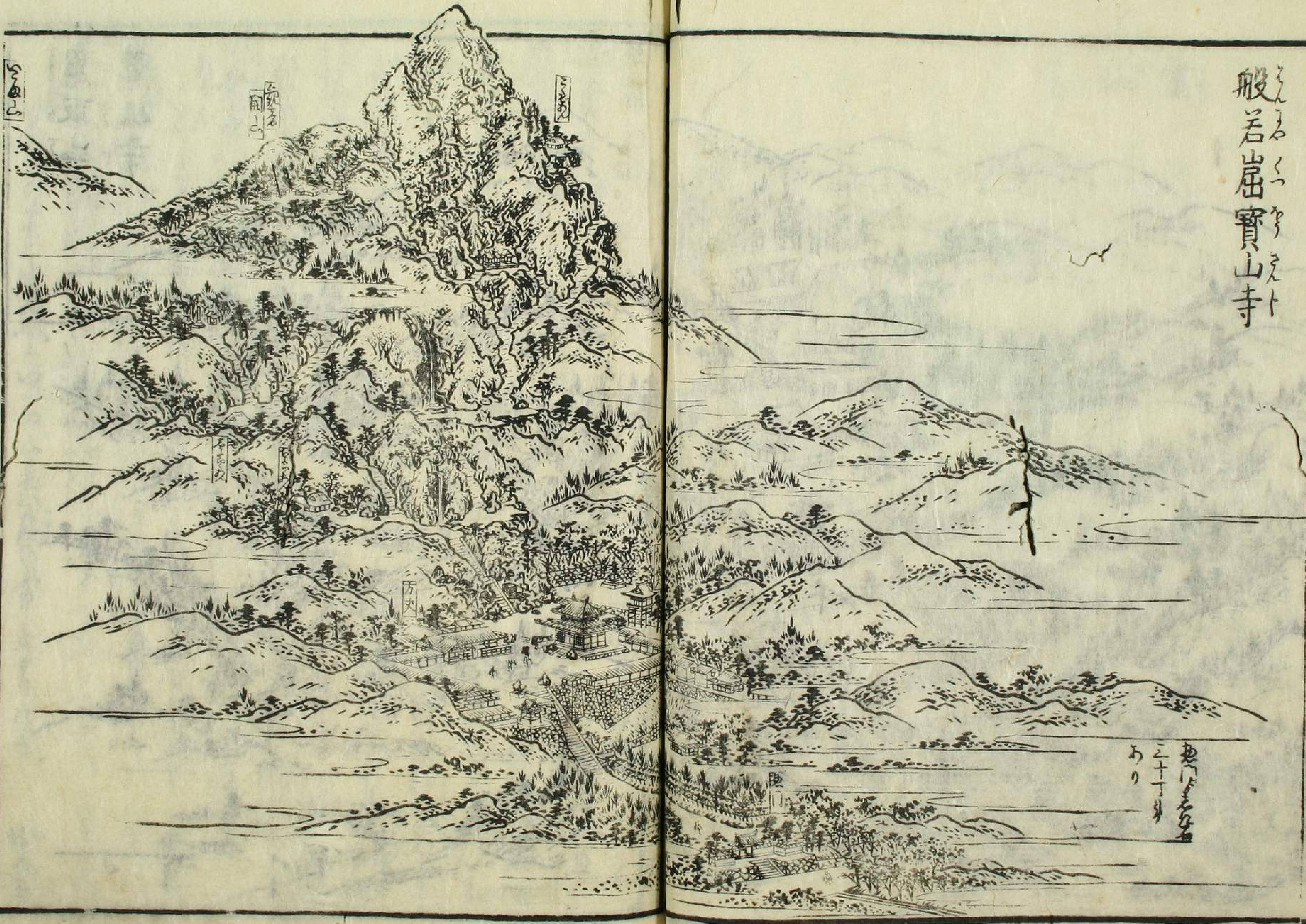
北谷越 萩田村より國境まで廿八町 山城國山田村へ出る 私部越 河州私部村へ出る 清瀧越 河州津村へいづる

岩船越 河州私市村へいづる 八幡祠 高山村にあり 續日本紀出 押熊祠 押熊村にあり 祭る所二座

秋篠川 水源は押熊中山より秋篠を經て郡山の北に至て大橋川といふ又京終村に至て佐保川に入

霊仙寺

（りやう）（ぜん）



般若窟寶山寺

御櫛社 櫛原村にあり 神名帳出　山口社 櫛原村にあり 神名帳出　阿弥陀井 西向村にあり

福貴寺 福貴村にあり道詮法師求聞持の法を修せられし所也道詮は武列の人なり久しく法隆寺に於て三論を学ひ後には自然と悟りを得たり

鬼取山鶴林寺 平群郡生駒山の麓 有里村にあり 本尊は薬師如来なり此寺の旧名を般若窟といふ又鬼取とは役行者義学義賢の二鬼をとらへられし所なりされば役行者此山にこもりて鬼神をあつめしは此ところなりとぞ又此ひとつあつまりて者には咒縛ありし故に随ひけるとぞ 続日本紀

竹林寺 同所にあり 行基菩薩の建立なり文殊大士を本尊とし行基を菅原寺にて入寂ありしかども遺詞によりて此堂の下に納むる

小倉峯 小倉村の上にあり　教弘寺 小倉村にあり昔は広く今は寺坊六坊あり艮の方に峠あり俗に鬼の城といふ

新古今　おもひやる雲のまよひに立田山そこともしらぬ花の白雲　宗家

往馬社 一分村にあり寛文記曰生駒祠七社生駒党十七郷の氏神也神名帳曰伊古麻都比古神社二座並大月次新嘗

生駒山 西は河内に隣り東に小谷あり巌屋山ともいふ疊峯森然として山頂巍々たり

新勅　くもりなき雲のまよひにかゝりていこま山まさに霞のたちかくしけり　堀河院

玉葉に
生駒山あらしも秋の色に吹く手染の糸のよるぞかなしき　定家
續後拾遺
春風に伊駒の山の花散れば雲こそかゝれ峯の桜は　法印定為
新拾遺
雲はさぞたなびきわたる葛城の尾上の花や生駒山なるらん　順徳院御製
咲ぬれば尾上の花や生駒山雲ぞかゝれる又雲かとみらん　素暹法師

椋嶺越　平群郡西畑村より新家村に至る。大坂街道の東の崎にあり。大和國西畑村の内其余は河内國也。新より北は生駒山南は小倉寺にいたる。此山路を椋ケ嶺といふ。世に山をくらがり峠といへり。くらき小倉山のいひかへかいふ。生駒山乃松杉の大木茂りてくらきゆへ名づけしといふ説あり。今も寄附ありて小倉寺の郷山の城跡ありて昔の人のこしらへし所也。豊臣秀長公の峠とする椋ケ嶺なり字るへし

泊船集
菜の花の中に城あり郡山　芭蕉翁
椋嶺の峠より登り節句の節句かな

鳴川山千光寺　嶋川村にあり。役小角御年二十七歳に至るまで此山に住して顕密の法を修し般若窟に日夜持念しけるに嚴間より光明赫々として千手觀世音出現し給ひ者歓喜恰悦し尊像を刻て安置し給ふ。其後大峯をひらきて彼にうつり給ふ故に當山を元山上と号て行者の行場大峯に等くあり。不動名日正堂一字佛舍上の字古憧あり。勅日元仁二年四月鑄

生駒谷　西畑　藤尾　萩原　小平尾　乙田　小瀬　一分　有里　大門　鬼取　小倉寺　菜畑　山崎　辻　谷田　俵口　小明　以上十七村生駒谷と呼

水瀧石　生駒山の名産也。菜畑村一分村に多く出る。山のくぼみより石をとりて是に水をかけ砥にて磨き緑色の石色つやよく器にして佳なり。菜畑に名高し。これを上品とす。生駒山の四国雜々拾遺に潮瀧石あり。蛮名スランカステンと名付用意乃ものにいへ。甲用意乃ものにいへ。四國雜々拾遺に潮瀧石あり蛮名スランカステン一名毛溜といふ。是よりて海中にあるをとりて此石を灰に焼き日海上より四十町の底にいりて海中にしばらく沈め海中にとりて是を濾きくゆ人海あるにその海上より四十町の底にいりてふかく水をくみとりて、米俵に入て海上にいだす。米俵に入て汲んだ水は潮水にても入るゝ所に汲み上ればさしくに皆水となる。古より是を器に入れてたくはへ桶に汲む事なり。沙にて米をかしく濾せば米となる。

巌上祠　辻本塚村にあり。神名帳出

安明寺　安明寺村にあり。俗に叶堂といふ。聖徳太子の建立也。安明寺叶堂の名あり。旗岳はこの西にあり

平群祠　西宮村にあり。神名帳出

金勝寺　椣原村にあり。堂の後に聖徳太子手づから一宇を建給ふ。大岩あり佛像を彫る

椹本社　椹本村にあり。今野馬田明神と称す。神名帳出

椹井　椹井村にあり。千塚　其たぐひなり

雙墓　椹本村にあり。一は吉備内親王之墓。一は長屋王之墓

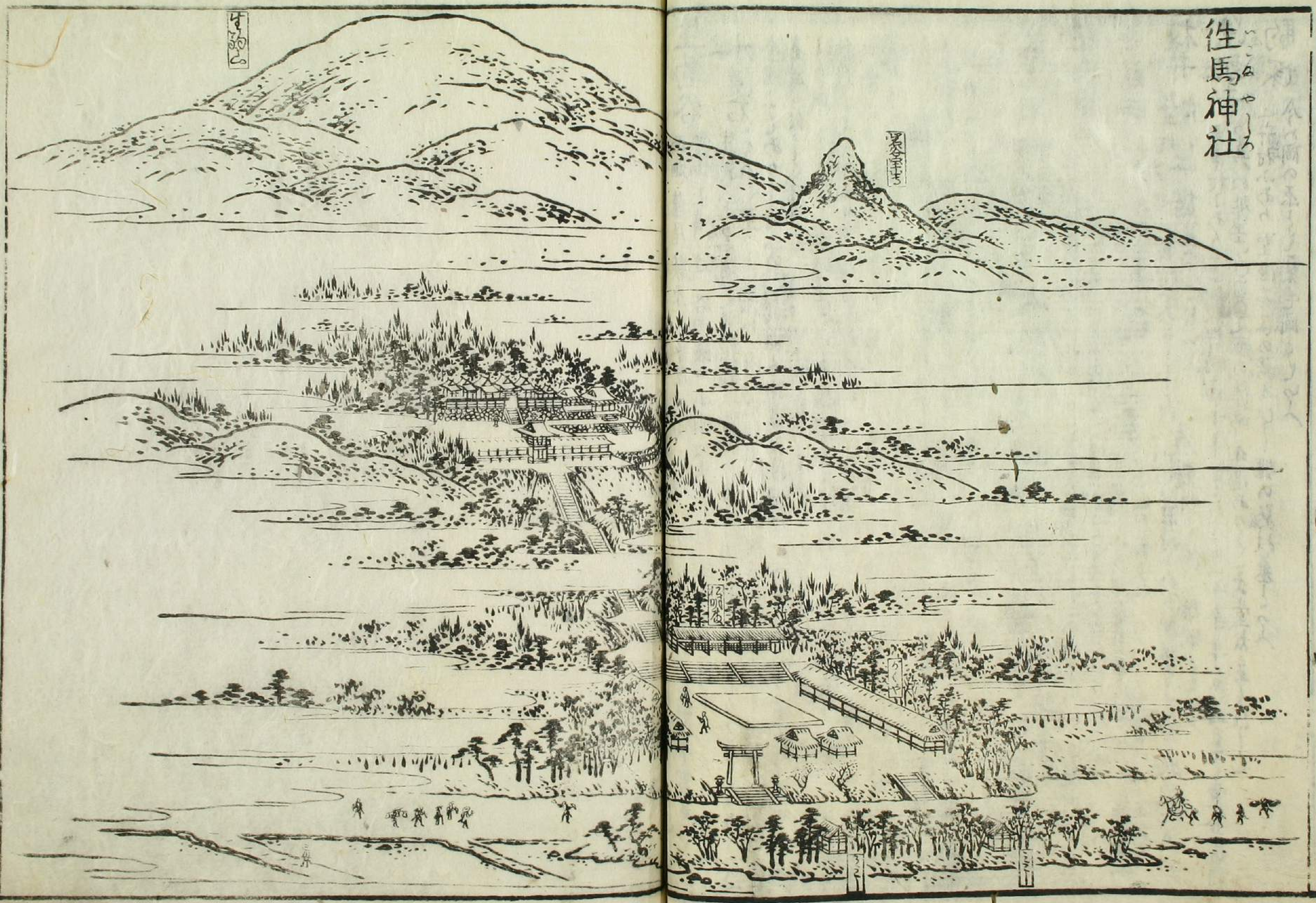
藥師井　白石畑村にあり

法起寺　岡寺村にあり。舒明帝十年に聖徳太子の建立

瓦塚　以上三井村にあり。千とは其たぐひにあらず

駒塚　三井村にあり。延寶より三千余年なり。聖徳太子の愛馬の甲斐の黒駒の葬地也。太子堂は舎利の堂に立つ。

往馬神社（いこまやしろ）



新千載

峰るいはねの
山やまかつらん
あこつる雲の
外にふく
なり

光明峯寺入道
前摂政左大臣

法輪寺 法起寺の西三井村にあり推古帝年中山背大兄王由義王等始て此寺を建立し星霜一千百余年を経ぬ今ハ只塔一基のミ遺れり

舟塚 法輪寺の舟塚の西にありし池ハ此にありしといへり

三井 三井村にあり近年一井を堀出せり

調子丸家地 法隆寺の艮の隅にあり玉林抄に日調子麿ハ太子十三歳の時四月八日初て百済より来る百済國聖明王の臣調宰相一男なり太子に属して斑鳩宮に住し日夜兼仕す八十四歳にして剃髪て其子足人と號く出家して大安寺に止住す

北岡墓 法隆寺村にあり山背大兄王の墓也

大満池 法隆寺村にあり

斑鳩里 法隆寺の東院の地也斑鳩群居せしより此名あり推古帝九年聖徳太子此地に宮を建て斑鳩宮といへり

囲可乃池 法隆寺の内にあり

夫木
いかるがやよるへの池ハ氷るとも冨小川ぞ流れたえせね　乙鵜

冨小川 源ハ下郡より流れて高安に至り大井川といふ笠目に至りて廣瀬川に入一名斑鳩冨小川といふ名所なり

後拾遺
万代をとめる亀井の水やさハ冨小川のながれとるらん　弁乳母

金葉
君が代ハ冨緒川の水澄て千とせをふとも絶じとぞ思ふ　源忠季

新千載
いかるがや冨緒川の流こそ絶ぬ御法のためしなるらめ　権僧正良聖

拾玉
志る人もなき冨小川のながれにて人を道びく底のミゆらむ　前相國公経

高安里 舊名冨小川村といふ兼和年中在原業平河内国高安里に通ひし時此冨小川村にて夜々休らひし跡あり然後正暦の比高安村と改名あり

立田山嵐の音ありとあれ里をいかれおし寺に高安のよ　阿一

在平群郡夜摩郷

常楽寺 安堵村にあり 聖徳太子四十六ヶ所御建立其一 玉林抄此里往古夜麻郷なり其謂 春日霊現記に平群郡夜麻郷に春日影向之地是安堵村南に春日影向之霊地あり安堵村ハ南北飽波郷夜麻郷とも同村領なり

春日影向の御歌
我やどハ都のミなミしかぞすむ三笠の山のうきよのがれて

右の寺常楽寺 斯為小治田宮御宇天皇御代歳次壬午年上宮太子起居不安于時太子願平複即山背太兄王并由義王等始立此寺也所以高橋朝臣預寺事者膳之三穂娘為太子妃矣太子薨後以妃為檀越今斯高橋朝臣等三穂娘苗裔也 維于時延長六年歳次戊子三百一十年

住侶橋法空次真空道詮律師譲跡なりて後 寛弘三丙巳年伽藍破壊に及びけるを恵心僧都詔うけたまハりて諸堂再営東西安堵村にわかち

金堂 弥陀尊像安置し 観音堂太子堂各十二坊并飽波村にわかつ

なりわ當時御室御所直末寺なり

飽波神社 安堵村 總社牛頭天王 大和志 神護景雲元年幸飽波宮給 寛弘三丙午年
恵心僧都詔をうけたまわりて奉遷當社地御鎮座ハ聖徳太子芦垣宮
皇居の御時東五色雲靄霊叡の見御夢令白給是三種神宝霊叡也
素戔嗚尊先頭牛頭天王の化現なりわ太子始牛頭天王小祠神籬と
立給太子の御宮地なり太子守屋大連御對治の後詔安堵牛頭
天王御崇敬成給云く

末社 熊野権現社 春日社
住吉社 外二社

澆の井 飢人とうられと其乃直する ゑる敎
かくこれ井なりこといつる那

飽波乃里とふ今ハ跡たれどかくぬ安堵の名にゆかりある 阿一上人

朝日山 安堵村 太子小金塚といふ不岡ぞ見 鷹塚 同所南 太子御所持の白鷹
良とうりらくとれ紛りとうふよし 葬旧跡あり

平樂寺 同所小 大和志曰昔在窪田平樂寺是ハ夜ノ郷常樂寺の礎跡角之坊
あく とへり文永中大洪水之時寺の森と水流へ此辺ミ平木ち村
より水と浮ひ来りたわふより平木ちと名づけらる中奥簡井氏某良妙外あり

高安寺 同所乾 大和志曰高安村往古常樂寺礎跡あり此地飽波郷夜麻郷兩界ニ
を建 地蔵堂一宇造立
而 して東安堵領地あり中奥阿上人住なふ今高安村小持仏あり

鳴川山
元山上
とび石
大黒石

法隆寺 平群郡にあり 舊名斑鳩寺 法相宗八宗兼学 人皇三十二代用明天皇の皇子聖徳太子龍田明神のをしへに随せ斑鳩の地に伽藍を造立し給ふ一名七徳寺といふ金堂儼然として西に輪蔵そばだち鳥路ちかく号し東に鐘楼あり北に講堂をかまへて聖國寺と号す乾に鎮守の社頭を祠して寶蔵ちかくよし南に法隆学問寺の門山巍々として金皷の二口をかけたり上堂奥院大湯屋伽藍甚生して松風宝鐸の音信とて法の聲をつゞりし 南都七大寺の其一なり

金堂

大和名所記曰金堂は四方正面なり勅願は釈迦の三尊 鞍作鳥佛師の作也しとぞ今佛は元の薬師如来を用明天皇の御悩御祈のために作り給ふ其脇に多門天廣目天あり右に阿弥陀如来御母間人皇后の御為に造りのよ其脇に多聞天あり右にも薬師佛新造の金佛あり其前に持國天 鎮護國家七曜の御叙を持 増長天は孝謙帝の御願 東面は正観音 推古帝の御願 西面は阿弥陀三尊 光明皇后の御願 北面は虚空蔵菩薩 其脇に又阿弥陀佛あり背光ちかくの擬は鎌倉右大将頼朝の寄進なりといふ 霊寶録曰東北乃隅に伏蔵あり太子自作まうし佛像金銀等を収置ありといふ 釈迦

誕生佛は毎四月八日佛生會に出し奉る此堂は旅く毎正月七昼夜乃間最勝王経天下泰平乃御祈祷あり太子の封じ玉ふ香名かふをとれて牛王を押なり

講堂

寛文記曰大講堂は薬師の三尊四天像賓頭盧尊者を安置に
霊宝録曰聖徳太子法華勝鬘経御講讃の時掛給ふ金幢幡
出山釈迦 阿弥陀 如意輪観音 不動 薬師 釈迦誕生佛 五大尊 達磨
十一面観音 八歳龍女 舎利 伽羅多山地蔵 愛染 其外畫像多しあり

五重塔

大和名所記曰此塔は四方正面也東面は阿弥陀の二尊 東西や
文殊大士 浄名居士 南面は茶毘入棺 北面は涅槃 いづれも彩
佛師土にて作り造りし像也 玉林抄曰此塔婆を法隆寺と号す
日本紀曰守屋の首を檀に入て法隆寺建立の時廻廊の西北第三間の柱乃下に埋むといふ 中門乾の方第三柱下とも

上堂

寛文記曰本尊は釈迦三尊丈六像四天王長七尺
大涅槃像 釈尊八相成道の画像

西圓堂

寛文記曰八角宝形造り也本尊は薬師如来十二神将は行基の作也
世の人諸願のために太刀刀其外種々のものを納て堂内に満てり此殊不
思議社あり霊宝録曰此圓堂は光明皇后の御母公橘太夫人の造立也

大經藏 靈寶錄曰經論聖教等を納る 本尊は阿弥陀佛 恵日作之
此内に伏蔵あり當寺三伏蔵の一つなり

手水屋 靈宝録曰 後嵯峨上皇臨幸の時御手水所之
蔵王權現は安置に役行者の御作

三經院 靈宝録曰本尊阿弥陀佛は基作文殊弥勒四天王
每年一夏九旬太子御遺願の三經講談あり今に絶ず
七種寶器あり釈尊より勝鬘夫人に授られし納袈裟 梵網經
太子御自筆外題に御手の皮を押なし真鈴子 神代皇物し 賢聖瓢
春秋瓢ともいひて孔子等の聖賢の像 御足印 太子御足の跡なる踏出
しなし梓真弓 六目鏑 守屋大連が御退治の時の軍器なり 其外畫像
書軸など多くあり

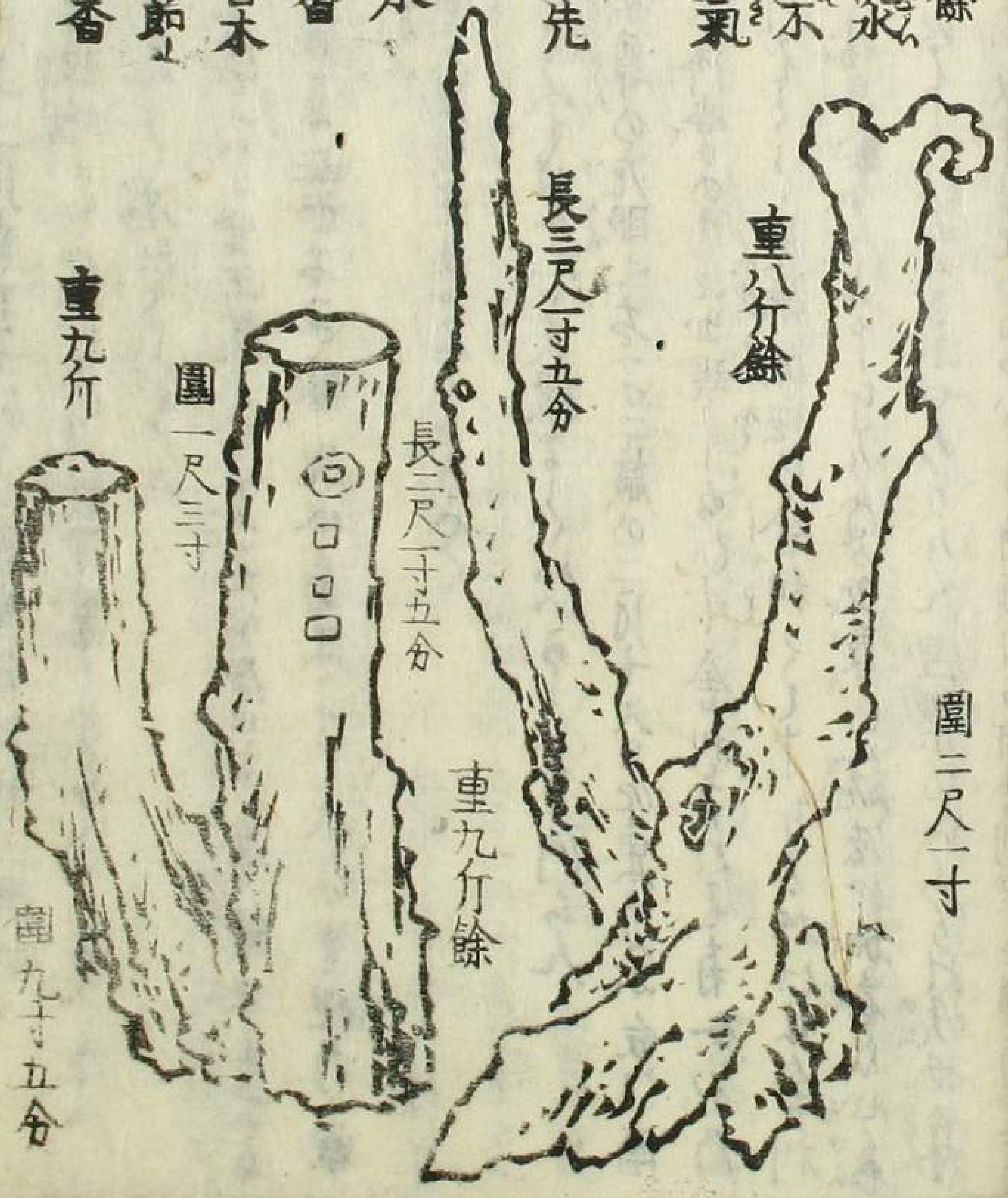
聖靈院 俗に太子堂といふ 皇太子攝政束帯の遺像あり 太兄王子
殖栗王子 茨田王子 恵慈法師 已上為佛師の作 其外御
沈水香 推古天皇の御宇土佐の南海より淡路嶋に流よりつきしより此香木
成いろく本尊を作り残りたる此蔵に納置なし足天下第一の
名香なりて旃檀香へ寺に法隆寺となつく是なり

沈水香之圖 惣重 二十二斤餘

日本書紀曰推古天皇三年四月沈水漂著於淡路嶋其大一圍嶋人不知沈水以交薪燒於竈其烟氣遠薫則異以獻之

南越志曰交州有蜜香樹欲取先斷其根經年後外皮朽爛木心與節堅黑沈水者爲沈香與水面平爲雞骨最麁者爲棧香

梁書曰林邑國出古具及沈香木土人斫斷積年皮朽爛而心節獨在置水中則沈故名曰沈香次不沈香者棧香之屬



大明一統志曰檀香出廣東雲南占城眞臘爪哇渤泥暹邏三佛齊回回等國今嶺南諸地亦有之樹葉皆似荔枝皮青色而澤

楞嚴經曰白旃檀塗身能除一切熱惱

華嚴經曰摩羅耶山出旃檀香名曰牛頭塗身設入火坑火不能燒

霊宝縁日 御鏡二面 四天王紋錦旗 糞掃衣 伎楽面 上代鈔箭 古代大指
御衣 雷琴 銘曰開元十二年歳在甲子五月五日於九龍縣造 其外かず〳〵あり

律学院 上宮太子十六歳御影 宗源寺 阿弥陀三尊 太子孝養
聖観音 愛染明王 常念仏修行のところ

東院 日本紀曰推古天皇九年二月皇太子初て宮室を斑鳩に興す
古今目録抄曰此地を斑鳩といふは、いかるが数万集り常に下て居しゆへ
ここに宮を造り斑鳩宮と名づく後に寺となる

夢殿 八角宝形堂也上宮王院ともいふ 上宮縁曰本尊観世音菩薩立
聖観音 東西九面観音 西面太子像 沈水香木にて太子聖作の観
世音あり 毎正月十二日開扉あり
御順礼記曰保安二年に御堂入道殿道長もうでられし
東院の東門のかたはらに

大君の御名をはなちてみもせねば夢殿ならくいかでしるらん

舎利堂 南無仏舎利 釈尊の左眼也 太子二歳の二月十五日に東方に向ひ南
無仏と唱へ開き給ふ御掌の内に出現しおはしし舎利これなり南無仏乃
尊号ありて仏法最初なれば、かく見仏聞法の舎利ともなる拆仏舎利
なるゆへに太子のお生れなりしより勝鬘夫人とならせ給ふ世尊の説法に帰依を心ざ
しそへる一説にいはく覚尼にすくひのかへるふやありけん涅槃のけがれ後世尊
の左眼の舎利を留めたまひける 扶桑略記に見へたり 御順礼記曰舎利堂を後持堂と
いふ毎日午の上刻に錦の七重の袋にいれ舎利塔にとりいれ錦の袋七重ながらひらき
玉塔の舎利を出さるる誠に万徳円満の形あらはにして利益衆生の光おさんやられ
侍りしまことに南無仏の舎利は月の朔に黒点一つを現し日々に増て十五日に満て十六日
より日々に減じて卅日に至て一点としてみえずなりし

南無仏の舎利を出せる七つの鐘もろともきこゆる今の双調　紫式部

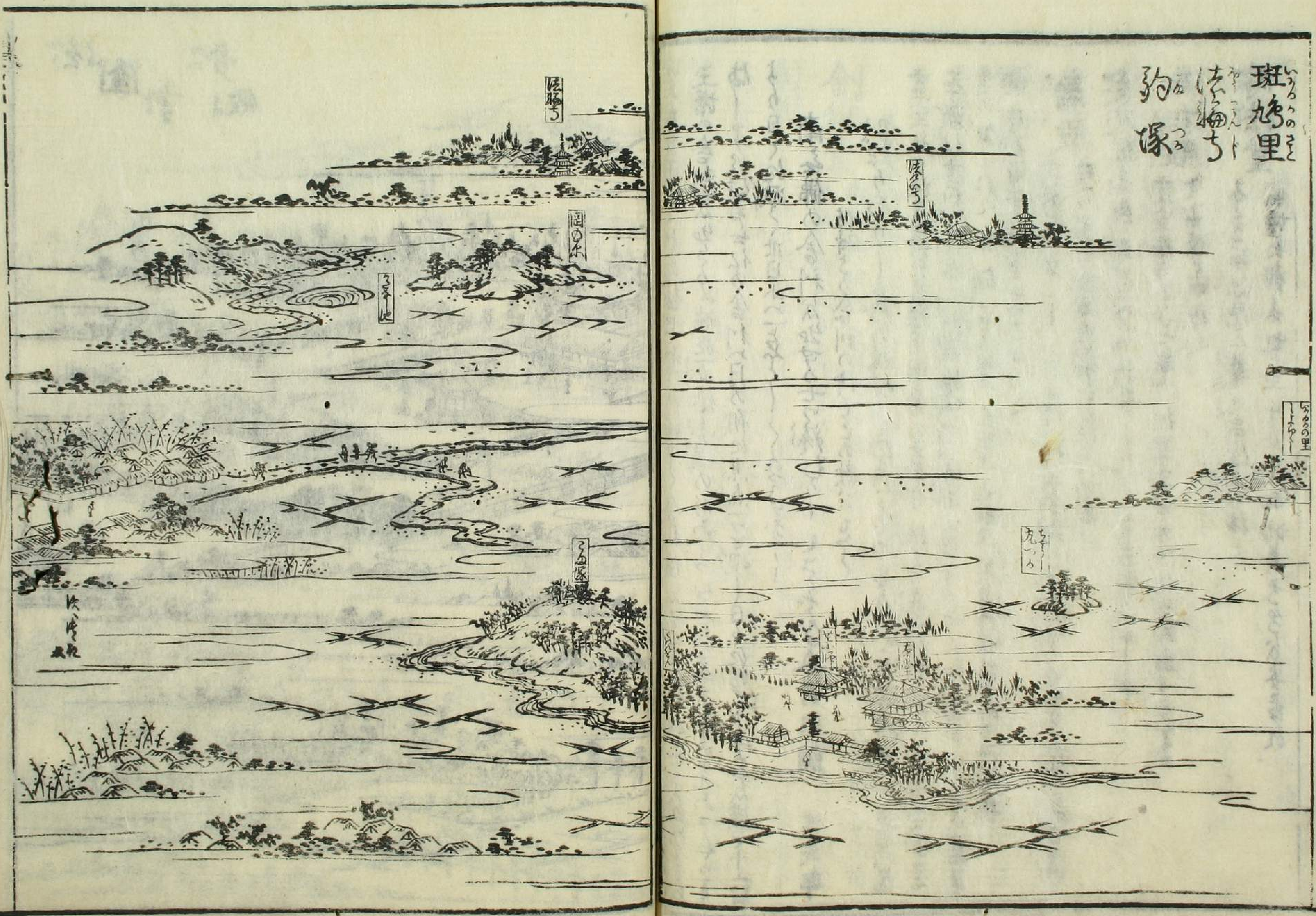
法隆寺の舎利の御ことの歌に見えたり
かぞへてもありし尊の林のこくみやとはこゆめさまるい、のるが九里

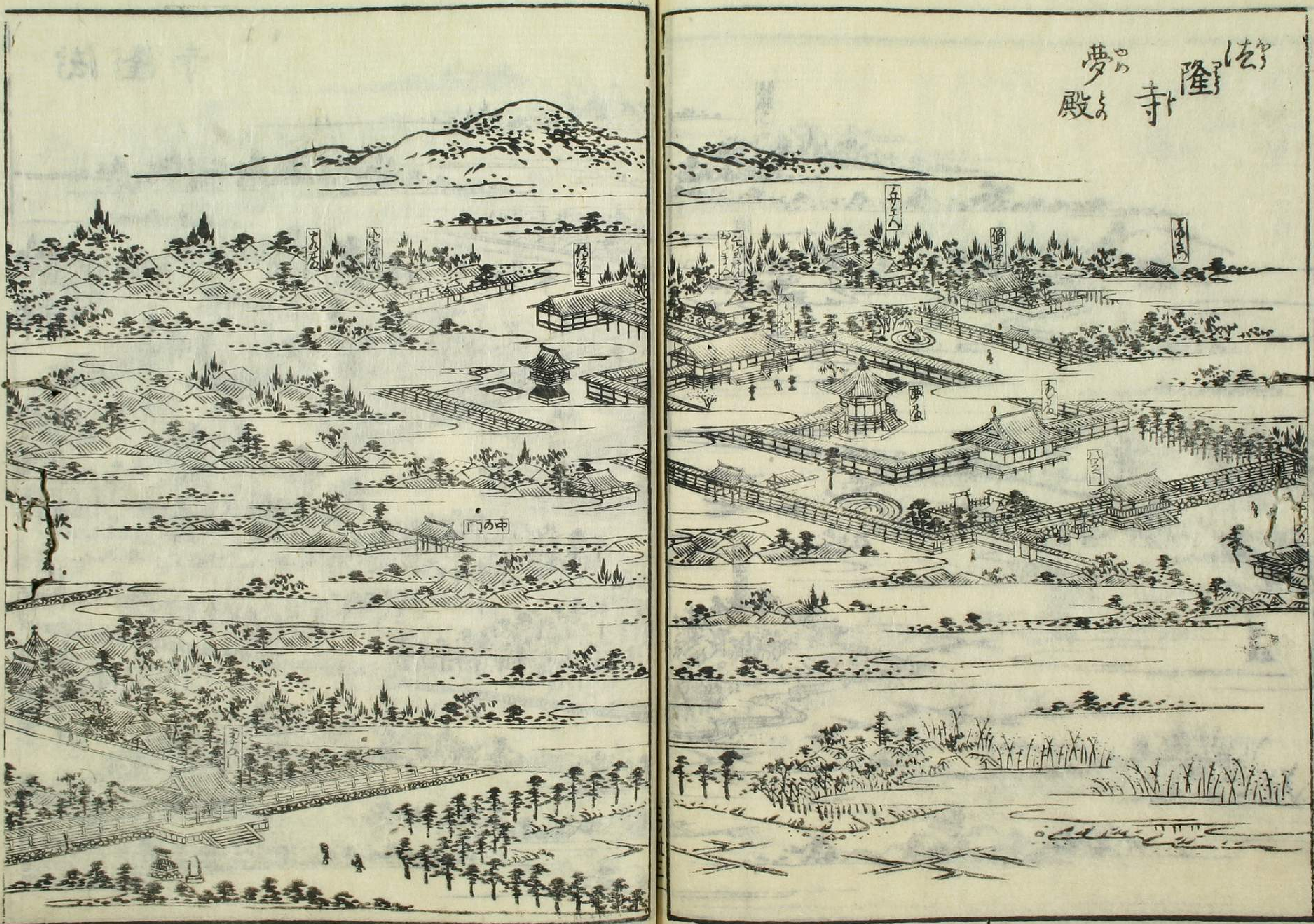
霊宝縁日法華義疏の首題用明帝の宸筆 法華義疏四巻 太子の御直筆 是
本朝仏書制作の始也 洞簫 推坂ふして此笛を吹かれ時山神舞出しより今の蘇莫
者の舞これ也 鐙 鉸 石名取王 火取王 水取王 太子御幼稚の時の御所持也
鐙 守屋退治の時太子のあぶみ也

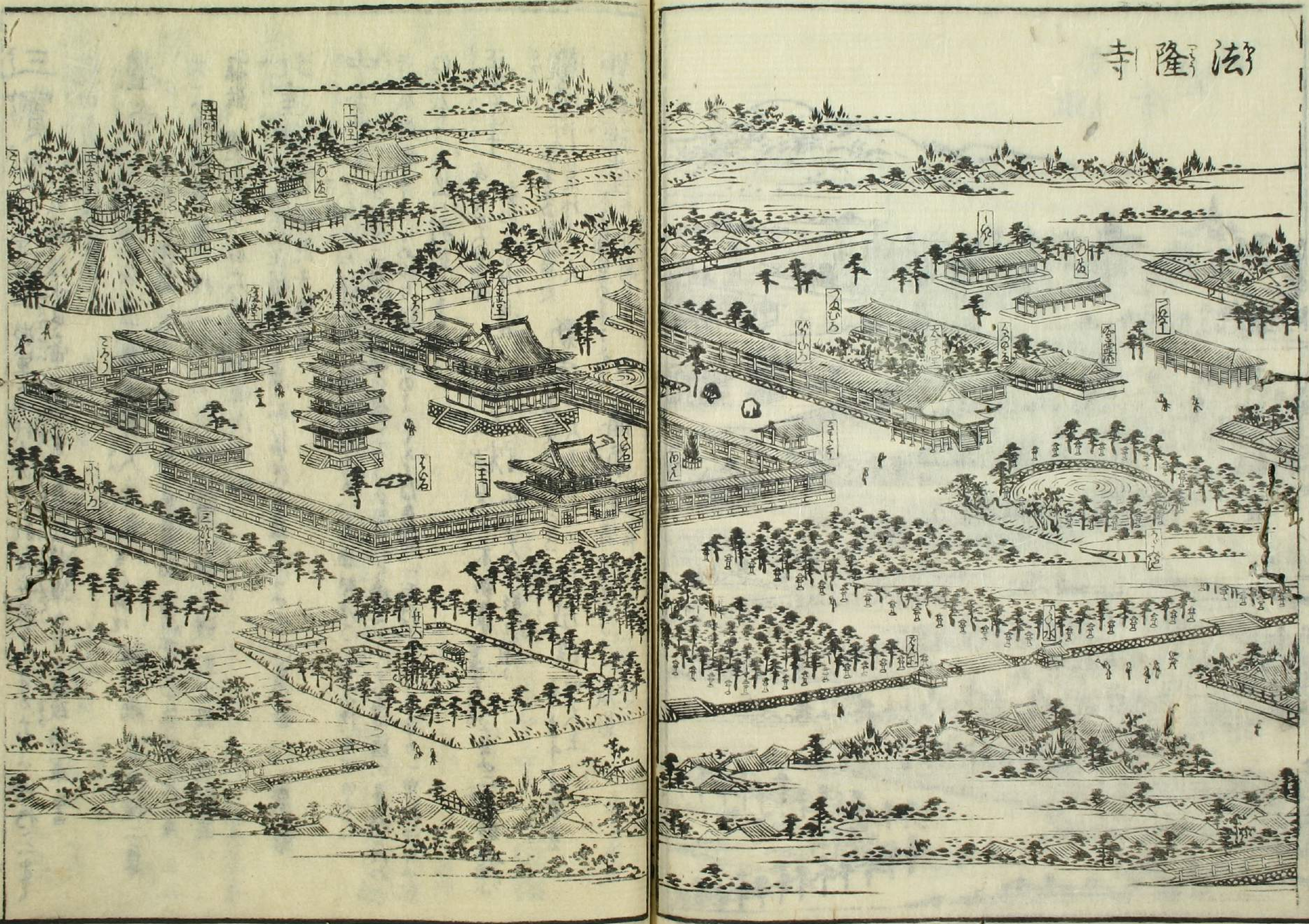
繪殿 武殿院と号して太子御一代の御行状を年にわかちて図す又後に藤原法定
延久元年摂津國秦致貞これを書く

御相殿 霊宝縁日太子七歳御影聖武帝の御作百済國よりわたる
夏達観音並夏が乃刀乃時祈誓これぞ是皇后にかかりともなど

傳法堂 本尊阿弥陀三尊九品浄土の様也
四面に披刀の様也
梵壇に観音勢至千手十一面地蔵等の像多くあり


斑鳩里（いかるがのさと）
法輪寺（ほうりんじ）
駒塚（こまつか）


法隆寺
夢殿
中の門


法隆寺
金堂
二王門

三寶院 霊宝録曰 将軍家代々の尊影を安置しまつり太子御作の尊像 外題後水尾帝宸翰 尊氏将軍書 義政将軍書
新田義貞自筆状

禮堂 霊宝録曰本尊十一面観音 梵天帝釈 鳥仏師作 誕生仏 赤栴檀二尊
舎利 如意輪 弁天 彩色燕國菩薩面 同将束 南無仏舎利 奥
太子御襖 華鬘 獅子頭二口 鞍韉 兆鼓 一鼓 三鼓 駝太鼓 舞楽面
振鉾 将束等 右大将頼朝卿御寄附

北室律院 霊宝録曰本尊阿弥陀三尊 太子十六歳影 同二歳影
弥陀千躰仏

中宮寺 大和志曰 法隆寺艮の隅にあり一名斑鳩尼寺 太子御母公の古宮
本尊二臂如意輪の像は太子の聖作也 當寺に天寿國の曼陀羅あり
綵纈織物にてめぐりに大綾のごとく亀甲一百ばかりつらなり一甲に四字あり
ぬひ合せり銘は別記に書けり

正覺寺 本尊大日如来 不動明王 弘法大師作

明王院 本尊不動尊 智證大師作 太子二歳影 西殿にあり
弘法大師影 東殿にあり

觀音院 本尊歓喜天 荒神十二天

新堂 本尊薬師如来 四天王

圓成院 本尊千手観音 四天王

如法經堂 天満宮の東にあり 十羅刹女

脩南院 本尊太子十六歳影 弁才天

常樂寺 本尊五智如来 大般若毎年修行あり

金光寺 西ノ堂といふ 本尊千手観音

藏王堂 山の奥にあり 本尊藏王権現

御廟 太子の御廟にまうでてよめる
王葉 [illegible] 花山院入道左大臣

常樂寺 法隆寺村巽古市場に一宇かたぶけるがのこりてありとぞ
聖徳太子は十六箇所御建立の其一つ也

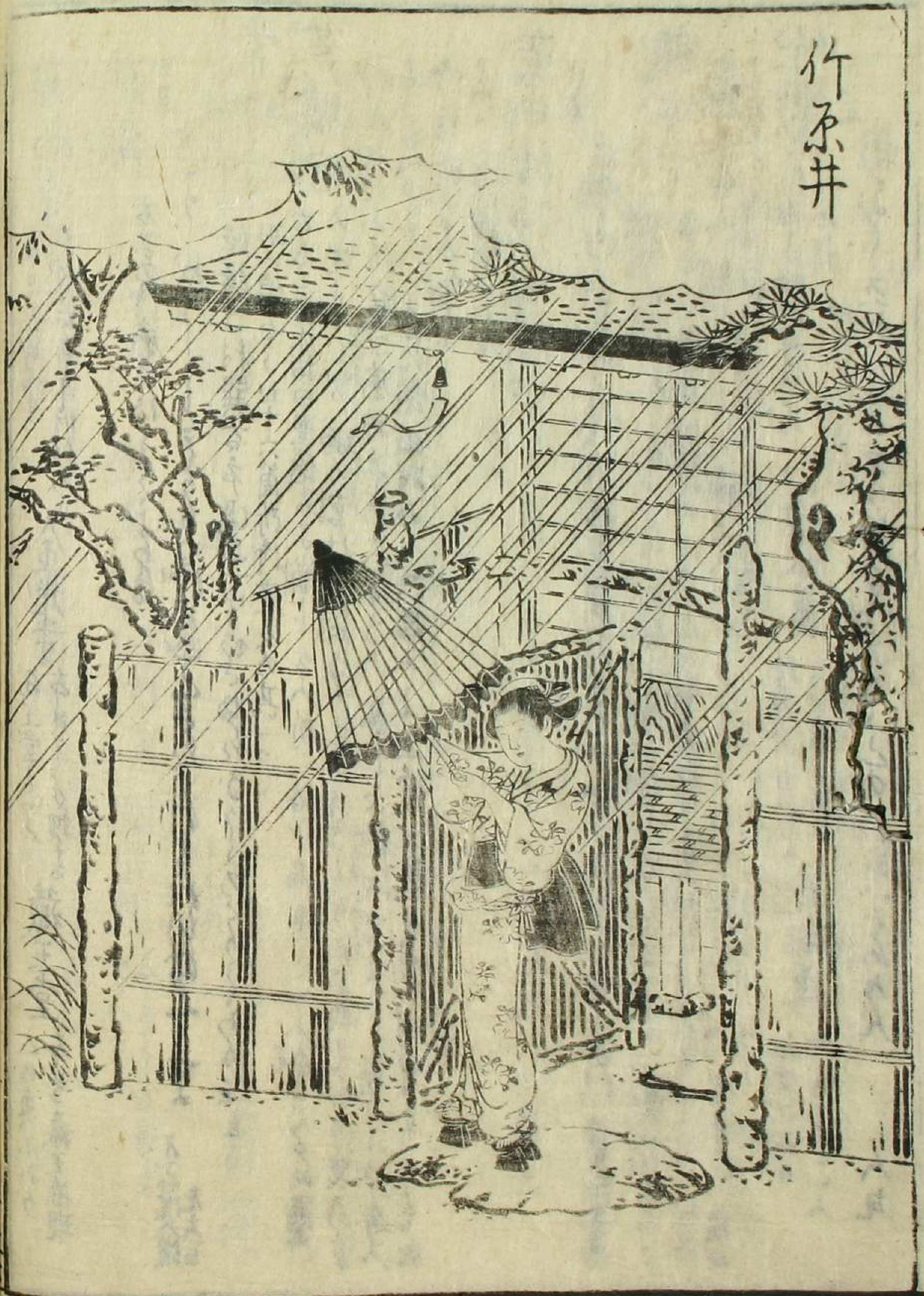
芦墻宮 古今目録抄曰聖徳太子崩じ玉ふ所也 俗に神屋といふ 今はなくて崩御の跡のみ
の北ふりくる芦垣の宮は名おなじく法隆寺より又六町ばかり巽乃方
神屋村にあり 又聖廟補闕の大安寺乃縁起に飽波宮ともいへり崩じ玉ふ
しるべくもあらず 只思ふに飽波村あり只思ふに上宮王院も芦垣宮といふし此
御住所なるべし

菅田池 菅田村にあり
まづかに南室のこれを
千載
[illegible]

額安寺 額田部村にあり 本尊十一面観音 推古帝御宇上宮太子三昧定を修し
日推古帝御平癒のため [illegible]
[illegible] 御額に痛 [illegible] 熊凝村に一の精舎を建 [illegible] 王林 [illegible]
[illegible] 其像を御造立の御願也

竹原井 推古村の辺なるべし 清水墓 新田村の南にあり 天武帝の妹王
不詳 苑部墓 西里にあり 御家山といふ
朝まだき [illegible]
人丸

光俊


竹原井

龍田新宮 法隆寺より六七町西にあり 氏人家は総て龍田明神といふ 祭神 古竜田比女神社一座 延喜式

新龍田は推古帝十四年二月十五日上宮太子法隆寺を建給はんとて伽藍の勝地を求めて巡りあり平群の川より西坂乃東なる所をよせたまひしに龍田明神老翁に化し来りて伽藍の勝地をしへられ我又守護神とならんとの神詫あり太子此神を崇め給ふ法隆寺を建立ありて龍田明神をむかへ崇神天皇の御宇に龍田山乃麓に鎮座し給ふ龍田の祭礼の日は法隆寺の衆僧二十人法隆寺よりなりうるしとなりそれより永く法としたりしとつたへ侍る立野の一宇並ぶ御幣をもつて鎮守とし給ふ又法隆寺の僧班鳩寺の僧に勧請して鎮守とす

亀瀬山 龍田の南にあり 伊駒越亀瀬越とて名あり聖徳太子のひしさかの道なりと玉林抄に見えたり

磐瀬杜 神南の東車瀬村にあり

後撰 立田川立ちなば君が名ををしみいはせの杜のいはじとぞ思ふ　元方

新古今 かくとだに思ふ心を岩瀬山下ゆく水のくさがくれつゝ　後徳大寺左大臣

新勅撰 神なびの岩瀬の杜の時鳥ならしの岡にいつかきなかん　田原天皇

続古今 夕暮は衣より外なりかのいはせの杜のかげぞ涼しき　正二位知家

続古今 神なびのいはせの杜の初しぐれしのびし色は秋風ぞ吹く　順徳院

続拾遺 そのつかさかけても袖に知るゝかな岩瀬の杜の秋の下露　僧正行意

毛無岡 岡安村にあり 立田大社より四町ばかり東の川添にてやゝ高き所あり里人呼んで垢離取場といふ此所なり毎年南都春日祭礼の神主人

新龍田垢離 さて垢離なせる垢離といふ是之

万葉拾遺 古へのならしの岡の時鳥こととへかへし君をつげこせや　大伴像見

拾遺 我せこがならしの岡の呼子鳥君呼びかへせ夜の更けぬ時　赤人

続千載 鳴わたるならしの岡の郭公古へ人ふしや忍ぶべし　[illegible]

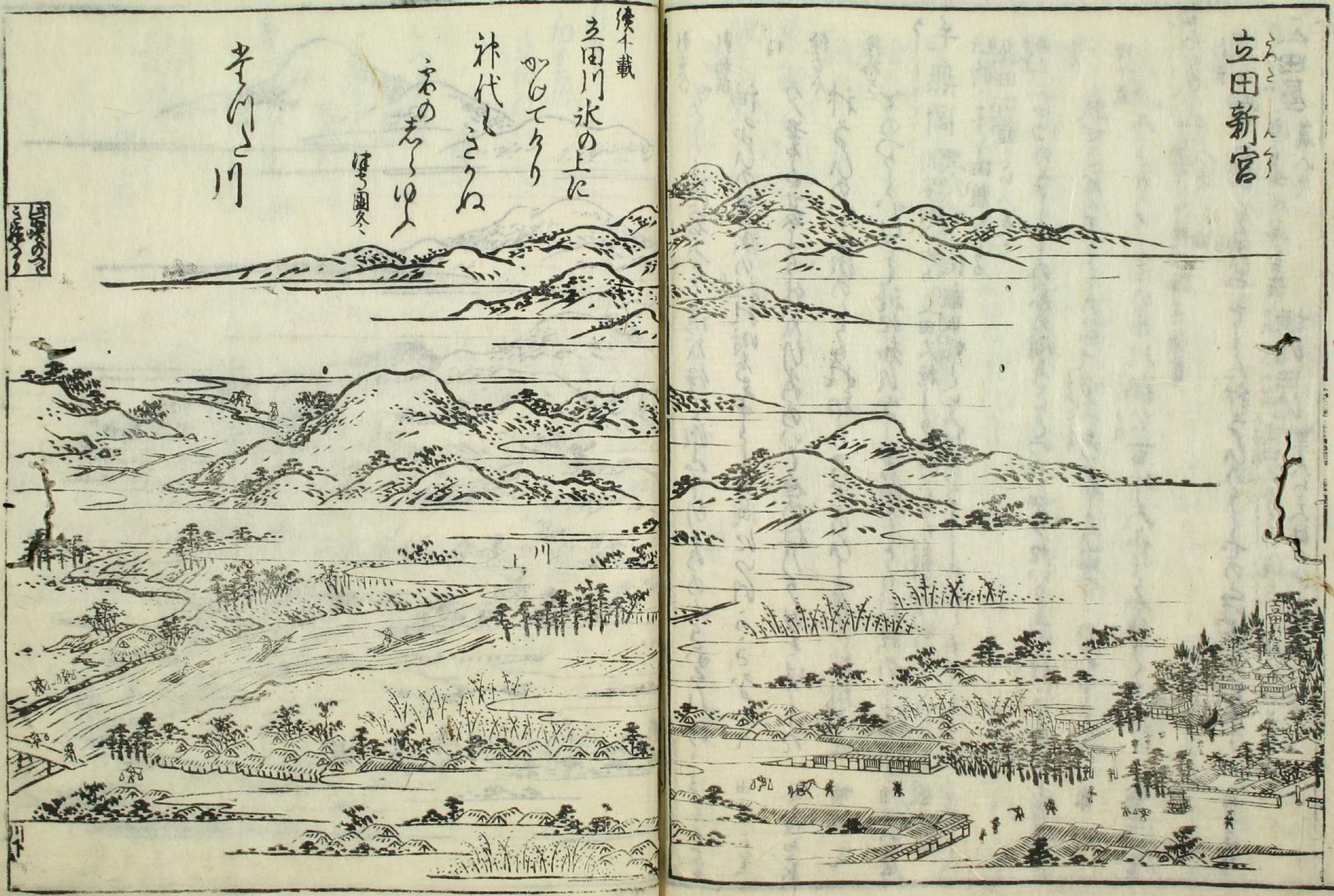
占手山 澄月云枕日神南備篇入之

名所 ぬく風にさそひやすらん神なびのうらての山の秋の紅葉を　恵慶法師

三田屋 澄月云枕神南備篇入之

堰津田池 里人は天満池といふ 或曰法隆寺の鎮守天満宮の前の池之とも

立田新宮(たつたしんぐう)

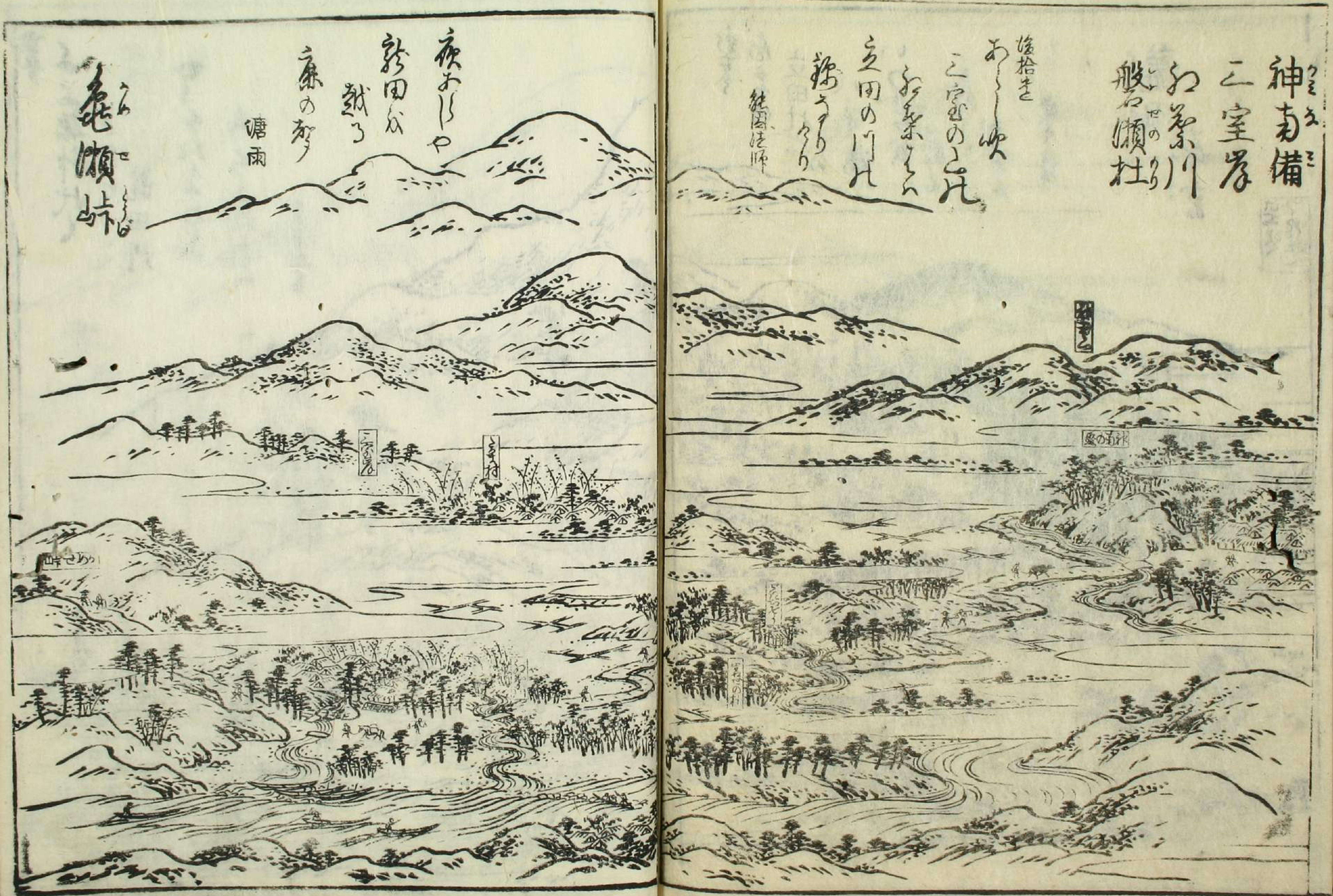


続千載

立田川氷の上に
かけてけり
神代もきかね
冬の志らゆふ
津守国冬

岩川さ川

新古今
白雲の立田の山の八重桜いつれを花とわきておりけん
道命法師
龍田本宮
此所次へつゞく
本宮
信貴山


神南備(かみなび)
三室岸(みむろのきし)
和叢川(にこくさかは)
磐瀬杜(いはせのもり)
後拾遺
あらし吹三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり
能因法師
夜あらしや龍田を越る鹿の声
塘雨
亀瀬峠(かめのせたうげ)

龍田川
ちはや振神代も
きかす
龍田川
からくれなゐに
水くゝるとは
業平朝臣

神南備（かみなび） 按るに大和之神なびは神南の三室の山不混乱 神南の處しよめるも大和にあり

古今 神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびの杜　讀人しらず

同 ちはやぶる神なびの山のもみぢばに思ひはかけじうつろふものを　同

金葉 春ふかみ神なび川にかげみえてうつろひにけり山吹の花　大弐長実

詞花 ねぶみへし梢もなれし白ゆふやいつか神なびのもり　関白前太政大臣

新古今 蛙なく神なび川に影みえて今や咲らん山吹の花　厚見王

浅小竹原（あさしのはら） 澄月か歌枕に神南に在 公綱入之

夫木 日くるゝ袖もの秋は神なびのあさしのはらの末わけて下くさ　衣笠大臣

神岳神社（かみおかじんじや） 神南村にあり 神名帳出　猪上神社（いのへじんじや） 信貴山にあり 神名帳出

信貴山観喜院朝護國孫子寺 開山明蓮上人 當初聖徳太子官軍の将として守屋大臣を攻給ひしに大臣の軍さかんにして官軍利あらず太子御身を危くし給ひて信貴山に逃入り太子御祈誓ありけるに忽毘沙門天の影あらはれ給ひて向ふところ敵なしと告給ふ信貴と名付給ひし故なり太子白膠木をもつて四天王の像を刻み御髻に収しめ又この所に社を建て新に進ませ給ひ駒山の麓に陣をしき老武者二騎忽然として味方に随ひけり人々是を見てあやしみけるに猛将なり一人は迹見赤檮といひ一人は坂上大臣といひけり赤檮遂に守屋を討とりて軍功をあらはしけり二将雲に乗じて去りぬ是は毘沙門天の多門天の化現なりと太子の給ひて石橋の上に方一丈の殿舎を建て信貴山の毘沙門天是なり其時皇太子此山に向ひて信ずべし貴むべしと宣ひしより信貴山とよび給へり

米尾（よねのを） 大和志社記曰毘沙門堂より十五六町下る麓に信貴の畑といふ所あり此所の住民不信心なりしかば毘沙門の祟によつて一郷の米が粉と化す今にあり土を焼て米とす

古城址（ふるしろのあと） 大和志社記曰此山の頂に古城の跡ありいにしへ松永霜臺此城に籠り其後大正子中松永弾正此城に居て自殺せられしなり

闇屋址（くらやのあと） 大和志曰立野村にあり天武天皇八年始て関を置く立野関龍田の名なり

信貴山

龍田山（たつたやま） 立野村の上にあり。形勢雄偉にして龍田川流遠くめぐり、山頭嶮しく、うしろくらく深く潔し。旅龍田といふなるべし。此前に雷神降りてわがはふりとなる。深くかくれて童子とあらはれ給ふなる農夫へやしなひてつかへせり。後も夏の初めよりくるゞ隣村にいたりされども此農夫が田のうへに白雨ふりそゝぎ稲花ならず秋の實のおのづから多くしくゆたかなり。其後此童子はいとなごやかに小竜となりて大空にのぼる。ゆゑに農夫が作る田を龍田と云。かゝるなやみ雨の名にせり。竜田は正字、立田は仮名なり。

万葉 大伴のみつの浜にとまりたる舟は出て行く龍田の山をいつかこえいかん 詞林採葉

古今 花のちる事やわびしき春霞立田の山のうぐひすの声 藤原後蔭

同 風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとりこゆらん 読人しらず

同 唐錦立田の山も今よりはもみぢながらにときはならなん 貫之

千載 年毎にかはらぬ松をまた立田の山のけしきなりけり 藤原朝臣

新古今 心やはもみぢせさらん龍田山松は時雨にぬれぬものかは 俊成

新勅撰 白妙のゆふつけ鳥も思ひわびなくや龍田の山のはつしも 家隆

龍田川（たつたがは） 廣瀬郡より流れ立野の西龍淵に至りて別に小倉川と号す。漕運の津とし舟を上り初瀬川と成り、加幡村に通ひ大和川と合す。通ふ高瀬舟とし或書に曰、龍田の町の西へ流れて川あり、是龍田川也。此川上は平群谷といふ。生駒嶽の麓より出る川より立野乃西ニ紅葉川ともいひ、小瀬ありて是な龍田川ともいへるとなり。

古今 龍田川もみぢみだれて流るめりわたらば錦中やたえなん 読人しらず

此歌或人のいはく奈良のみかどの御歌なりと。古今秘注曰文武帝の御製なり。阿古根浦口傳曰此歌は大同二年八月十二日平城天皇竜田川に遊覧の時よみ給へる御歌なり。川上に紅葉の錦のながれ、水神のよりきたるごとく見ゆるをいふ。帝の御心の奇しくも實はあれ神の御奇といふ。

同 龍田川もみぢとぢたる薄氷わたらばそれも中やたえなん 家隆

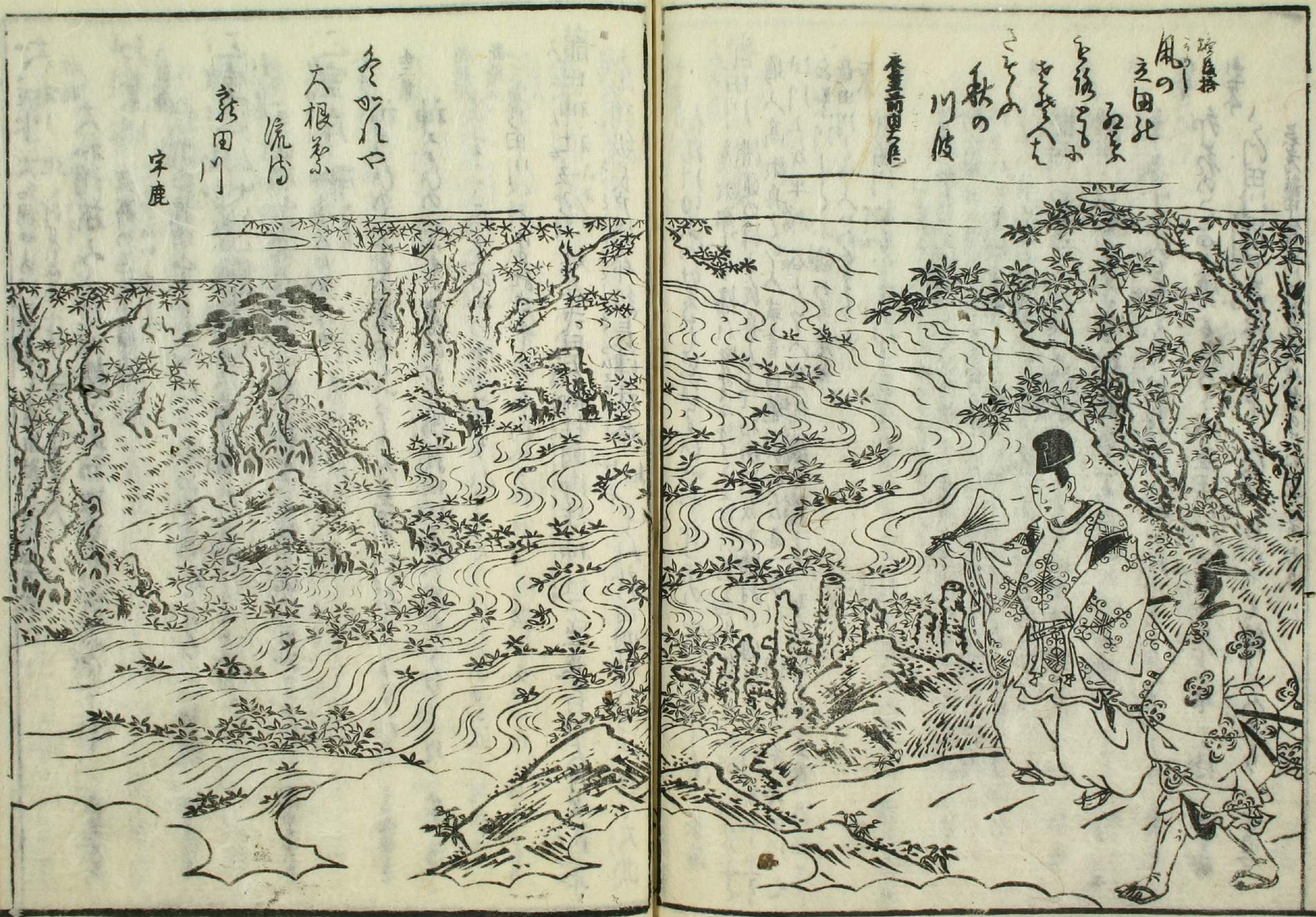
同 龍田川もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし 読人しらず 或奈良の帝

同 年毎にもみぢば流す龍田川みなとや秋のとまりなるらん 貫之

拾遺 卯花のさかる盛りを白波の立田の川の井せきとぞ見る 伊勢大輔

新古今 たつた川嵐や峯によはるらんわたらぬ水も錦たえけり 宮内卿

考ふるに龍田山龍田川の和歌廿一代集の内に百廿一首あり


誘ひ
風の
立田は
紅葉
も綾なす
錦さらす
きその
秋の
川波
参議前宰相
冬かれや
大根葉ぶ
流る
龍田川
宗鹿

大和川　大和國中の川瀬を合て龍田の南葛下郡の北より西に流れ末ハ河内に入

欽枕　大和川桜みだれて流るれば初瀬の山に嵐吹くらし　衣笠内大臣

紅葉川　立野の西に小流あり

月清集　秋風の龍田山よりながれきて紅葉の川をかくる白波　後京極

三室山　神南村にあり嶺に大島と號し又島山といふ人山中に三室院あり

新古今　立田川三室の山の近ければ紅葉を波に染ぬ日ぞなき　関白左大臣

三室岸　神南山の麓なり

拾遺　神なびの三室の岸やくづるらん立田の川の水のにごれる　高向草春

壬二集　神なびの三室の岸にわたる瀬も龍田川原の風ぞさびしき　家隆

新後撰　おほ島や三室の山の岩小菅それも見へなをおもひさはれ　順徳院

新續古今　龍田川三室きしの古柳水に絶まて幾代経ぬらん　源家長朝臣

龍田神社　立野村にあり　延喜式曰天御柱國御柱神社二座並名神大月次新嘗祭所級長戸邊命級長津彦命　日本紀　それ龍田明神の御鎮座ハ天武天皇四年四月小紫美濃王小錦下佐伯連廣足をつかはしめて龍田の立野に風神を祠らしむ又大山守尊称韓太としく廣瀬の川曲に大忌神を祭らしめ給へ拝し御神なり伊弉諾伊弉冊尊大八洲の國を生給ひて後伊弉諾尊我所生國唯朝霧のみありてかをりみてるかなと宣ひて則吹撥の氣化して神となる是風神なり　日本紀　又飢し時の人なす倉稲魂命とす　釈日本紀

第一ノ社　東向　級長戸邊命　纂疏曰級長ハ息の長くしてたくはへたる也戸ハ語助字なりて竜田姫とやく

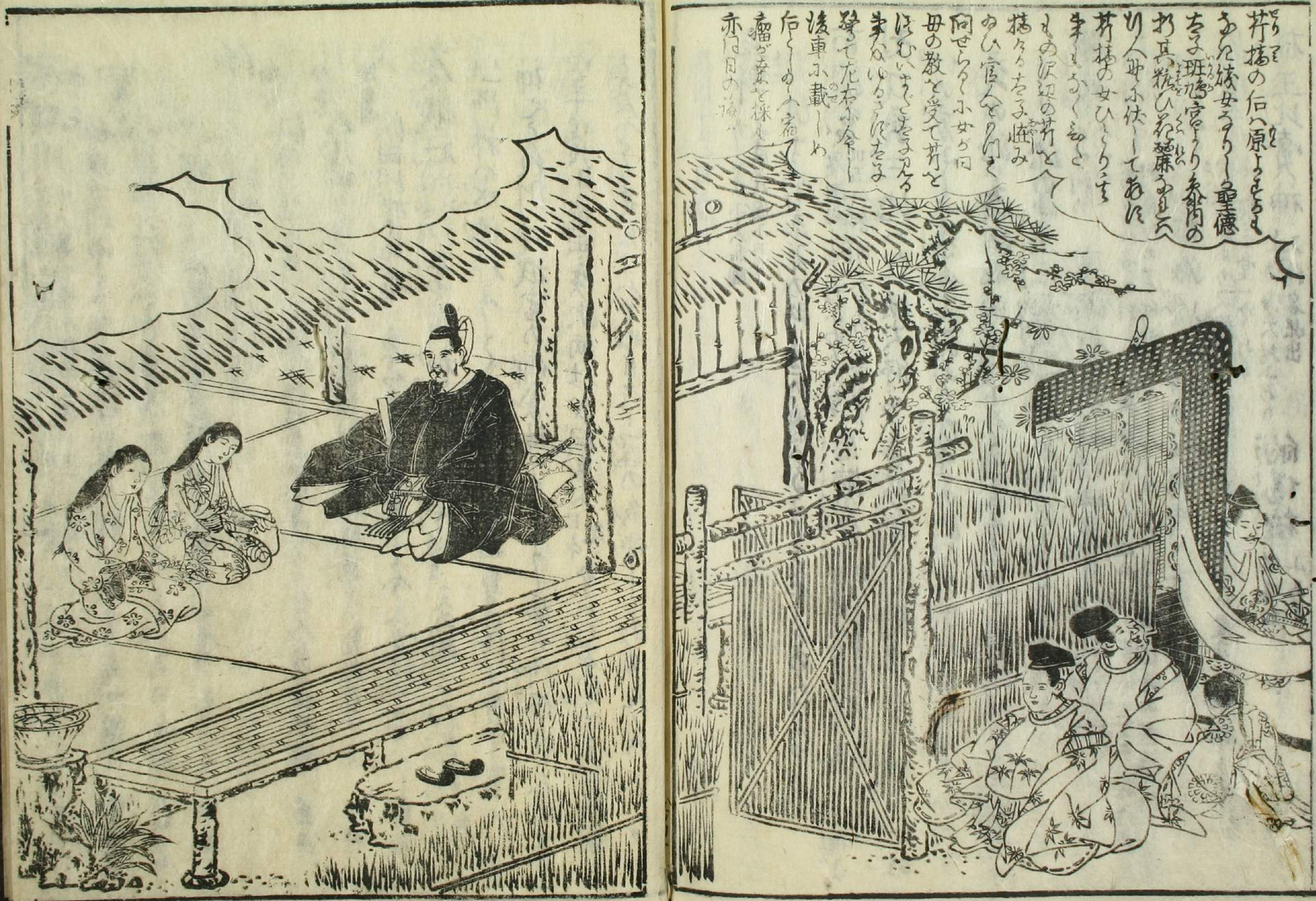
第二ノ社　東向　級長津彦命　纂疏曰津ハ語助字なり息長く彦ハ男なり　風神なり

瀧祭神　神祇本源曰瀧祭神と廣瀬竜田神と同躰異名水氣神なり　伊勢太神宮諸記　日坂土佛　瀧祭の神とくに泥の淵に枚枕るどの一也されどもその御社もなく...

御社もなく 神皇正統記曰　天祖國常立尊伊弉諾伊弉冊乃二神に勅して宣く豊葦原千五百秋瑞穂の地あり汝往て

九月十二日なり
立野（壬二）　竜田の西に大和國　又武蔵國にあり
りけるに立野の跡まて彼處かしこやとそのへんをめくる
百済宮（くだらのみや）　廣瀬郡百済村にあり人皇卅五代舒明天皇の皇宮なり　百済大寺（くだらのおほてら）　上宮太子の建立也今廢して僅に礎あり本尊毘沙門天は安置
列字池（おじのいけ）　三池は弘法大師やしなひ給ひし之　列字の池ハ田の中の
坤の方にして奏楽寺にあり　丈字の池ハ廣瀬郡百済太寺にあり
丸の池ハ廣瀬郡田中村にあり室町しての教指坏は聖迹ある
しく池の中に三教指をはなれ給ひしも今にあり
櫻嶺（さくらがみね）　当山坊村の深山にあり　廣瀬行宮（ひろせのあんぐう）　大塚村にあり　中嶋井（なかしまゐ）　長楽寺村にあり水清くして味耽し
大福寺（だいふくじ）　箸尾荘大村にあり真言宗にして昔弘法大師此所にて仏法を弘め給ひし所なり上宮太子の所建立　別に自他の茶師ゆかりの舊跡なる所あり
ありしより此　百済川（くだらがは）　廣瀬川に入　合に至る
長林寺（ちやうりんじ）　宍闇村にあり又那羅寺ともいふ上宮太子の建立之頽廃しく　今欽名堂一宇あり
櫛玉比賣神社（くしたまひめのやしろ）　無夫村にあり　神名帳出　的場橋（まとばのはし）　的場村にあり

すべしとて即天の瓊矛（あまのぬほこ）を授けたまふ二神此矛をさげ給ひて天の浮橋（うきはし）
の上にたゝずみて矛をさし下しかきさぐり給ひしかば滄海（あをうなばら）
のみありけり其矛のさきより滴る潮凝りて一ツの嶋となる是を名づけて
磤馭盧嶋（おのころしま）と云（中略）大日本國の霊ふるひしと云二神此嶋に降居て即
國の中の柱として八尋の殿を化作りて住給ふ（中略）又瀧祭（たきまつり）の神と申る
龍神は其神瓊矛を頓て地中におさめ給ひしとぞ又一説是ハ大和の
龍田神も此瀧祭に同躰にましまして此神の頓の給ふより天柱國柱（あまのみはしらくにのみはしら）
と云清名ありとも云（中略）龍田も霊山をそれ示されし竜神を天柱國柱
とのみもいへり源秘のことは有つこそや（正統記曰此霊山ハ金峯葛城峯なりとぞ之）
神階ハ貞観元年正月廿七日廣瀬神竜田神正一位を授け給ふ（式註）
額ハ正一位立田大明神と小野道風の筆也
祭ハ天武帝四年四月朔竜田風神廣瀬大忌神をまつらしめて此四
給ふ（日本紀）又大忌神風神の祭並て四月四日七月四日之（歌林本紀）今も


芹摘の后ハ原よりきさき
となる婕女なりし聖徳
太子班鳩宮より参内の
折其粧ひ花蘂麻呂に六
目ハ地に伏してあれハ
芹摘の女ひとりまき
来たまふくらさ
もの沢辺の芹を
摘々太子睡み
女ひ官人をの消き
向せらるく小女が曰
母の教を受て芹を
摘むいまで太子みる
事なりれいさまを子
登て左右に命し
後車に載しわ
后とし一の宮
瘤が妻を採も
赤ハ日の論ハ

廣瀬川　大和志曰初瀬川石川葛城川高見川の四水会合して廣瀬川となる葛下郡平群郡の界に至りて龍田川となる

新千載
はつせ川わたりの小田もせき入て紬つくむら乃早苗かな　法印定円

新續古今
五月雨に汀まさりて廣瀬川なにこそそれの名の波　雅経

千五百番歌合
御禊して神の恵も廣瀬川絶す子世をもまもる神かも　隆信

澤田川　此川の上に沢田村といふあり　廣瀬川とも呼なり

拾玉
沢田川流れの一つき橋うれねば五月雨の頃　慈鎮

今昔
五月雨にかゝるもあやし沢田川せゝの継橋うれぬまて　為仲

續後撰
沢田川せゝの岩波しげけれど万代やすめん　躬恒

廣瀬社　河合村にあり　延喜式　祭る所和加宇加売命又の御名大忌神　日本紀

此御神は水徳神にして伊弉諾伊弉冊尊の御子豊宇賀乃売

神とこれ則神祇官の御食神なり天武天皇

四年四月に竜田廣瀬両社を祠らる　日本紀　祭は日本紀に四月朔日

より七月にいたり其にしてあるなとみのり

苗稼うはしひ民にいたいひかえ給ふ　令義解

牧野墓　廣瀬村の西二十町許にあり　延喜　敏達天皇太后の先和氏墓　成相墓　牧野墓十町許東にあり押坂彦人大兄皇子墓之　延喜

三立岡墓　ふるき皇子墓之　延喜　牧野墓の向東六町にあり二墓の墓脚の足のかし

葺田原　葺田池　日見橋　舩戸渡　いつれも葛下郡王寺村にあり

片岡神社　王寺村にあり今五社明神といふ　久度神社　王寺村にあり　神名帳に出

久度寺　一名西安寺と号す聖徳太子の建立　久度里にあり　久度里　在原業平の別荘ありしと

孝霊天皇陵　王寺村にあり　陵考云　白山形の高さ八間　地廻廿五間

片岡山達磨寺　王寺村にあり　推古天皇二十一年十二月聖徳太子片岡山の辺に

しく飢人道のほとりにふせるをみ給ひて姓名をとはせ給ひしかとも

こたへたまはす飲食をあたへ衣裳を脱てかけ給ひていはく

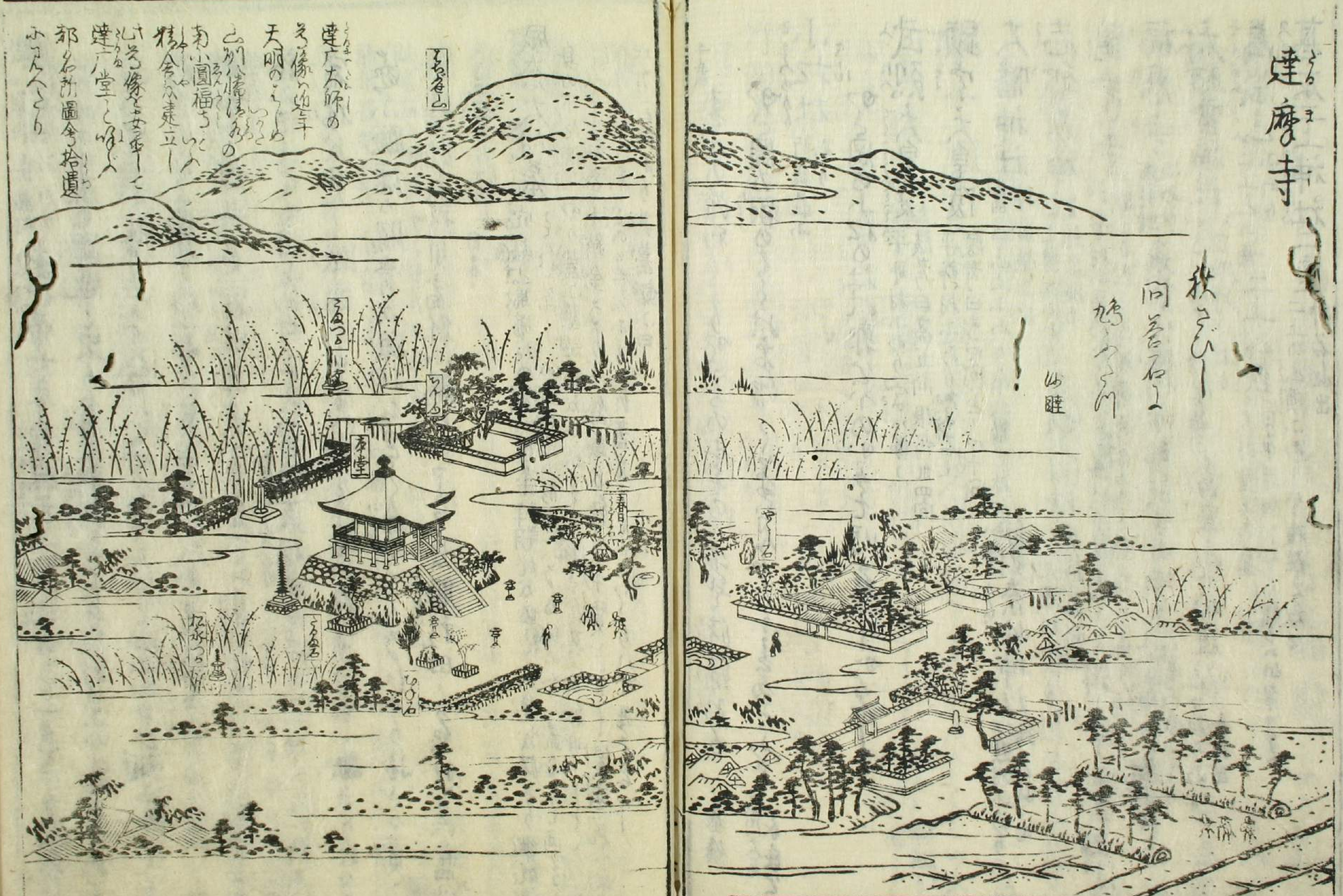
やすくふせれと則御歌

拾遺
しなてるや片岡山に飯に飢てふせる旅人あはれおやなし　聖徳太子

同
いかるかや富のを川の絶はこそ我大君の御名わすれめ　飢人

扨翌日飢人死りと聞しめして使をつかはしてその所に埋み葬らしめ給ひき
其後日数を経てかの屍骨なくなりしかば衣服は棺の上にたゝみ置く
骸骨なくなりけるに其きぬはたゝみて棺の上にあり使かへりて申す
されば時の人はじめて聖の聖なる事をしりてありがたくおもひ
あへりとぞ（日本紀）則飢人を墓につくらせ給ひ達磨墳といへり（釈書）其墳のうへの
塔は勝月上人の起立にして聖徳太子と達磨大師の遺像を安置
せり勝月上人は解脱上人の同時代の人也（撰集抄・道要）又の説に解脱上人かの
墳に三重塔をたて草室をかまへ達磨寺と号せられしともいふ
堂の後に碑銘あり南禅寺惟肖和尚の文也（今京師南禅寺金地院に属して大明三年彼地の南清水に）
達磨堂は大和名所図会拾遺に…（達磨の像あり）
放光寺 王寺村に礎石あり 氷室址 王寺村の山中 三松廃寺 畠田村にあり礎石あり
片岡山 今泉村 片岡地 朝原にあり 名所
拾遺 おそくとも菜浅茅の片岡の朝の原をけふ焼ねば 人丸

千載 まちの初しより片岡のもりのこずゑも浅緑なる 基俊
片岡の朝の原は…まだ消ぬ雪かとみえて… 衣笠内大臣家良公
小松杜 片岡荘にあり
六帖 片岡の小松の杜に郭公のかよひそめぬるしかるべし
武烈天皇陵 平野村にあり 字ハ塚山 陵考曰高五間根廻り卅四間
顕宗天皇陵 平野村にあり 字石上 陵考曰高六間廻り四十間
大幡神社 畠山山上にあり今八幡と称す 神名帳に出
志都美神社 上里村にあり 神名帳出
伊射奈岐神社 下牧村にあり 神名帳ニ出
大坂山口神社 穴蒸村にあり 神名帳出
龍峯寺 片岡守村に其昔あり…の御代の皇子…
福應寺 狐井村にあり 恵心院源信僧都誕生の地也 …
火雷神社 かち村にあり 神名帳出
當麻山口神社 山口村にあり 神名帳出
萬歳山 二上山の南にあり
二上山墓 大津皇子の墓 日本詩賦を初て作られし皇子也
葛木二上神社 二座 神名帳出 二上の山頂にあり今権現と称す


達磨寺
荻さびし
同蓋石よ
鳩のかへ川
以睦
達磨大師の
名像は先年
天明のころ
山州備清水の
東小圓福寺といへる
精舎に建立し
寺号像を安置して
達磨堂と呼べ
都名所圖會拾遺
にくはしくあり

腰折田良福村にあり 垂仁帝七年當麻蹶速といふ力のすぐれたる人あり
名を當麻の蹶速といふて角を折り鉤をのばすほどの人にて常にいひけるは
世の中に我にならぶ力ある者あらんやと人にほこりけるをきこしめし
諮りて天皇これをきこしめし誰か此力に相當る人あらんやと近臣進んで
出雲國に野見宿禰といふ人ありこれを召して力をくらべ給へと奏しける
程にさしたる勇士なりとてその日倭直祖長尾市を勅使として野見
宿禰を召し蹶速と相撲をとらせ給ふに互にふみあひけるが
遂に蹶速が脇骨を蹶折りて命をとりぬ ひろく勝れたる賞に
蹶速が地を野見宿禰に賜はれり 是を腰折田と名づけて其舊址
を遺しけるとぞ 日本紀

威奈大村墓 穴虫村馬場村の農夫近年耕作に地をほりて大甕を得たり破砕
すれば中に一の銅器あり形毬のごとく蓋身とも両分す
身の下に圓足あり 蓋に墓誌銘を小楷にて刻む其字鮮明にしてよく讀べし
銅器を鍍金なり 千餘載を經て其質を變じ紫緑の色を生ず
ところどころ鍍金のあとなほあらはれて蓋并身とも口のわたり八寸 深さ各四寸 重サ廿
四斤二両あり 其墓銘に曰

小納言正五位下威奈卿墓誌銘并序　卿諱大村檜前五百野宮御宇
天皇之四世後岡本聖朝紫冠威奈鏡公之第三子也卿温良在性恭倹
為懐簡而廉隅柔而成立後清原聖朝初授務廣肆藤原聖朝小納言闕於
是高門貴冑各望備員　天皇特擢卿除小納言授勤廣肆居無幾進位直
廣肆以大寶元年律令初定更授從五位下仍兼侍從卿對揚宸扆參賛絲
綸之密朝夕帷幄深陳獻替之規四年正月進爵從五位上慶雲二年命兼太
政官左小辨越後北疆衝接蝦虜柔懷鎮撫允屬其人同歳十一月十六日命卿
除越後城司四年二月進爵正五位下卿臨之以德澤扇之以仁風化洽刑清令行
禁止所冀亨茲景祐錫以長齡豈謂一朝遽成千古以慶雲四年歳在丁未四月
廿四日寢疾終於越城時年卌六粤以其年冬十一月乙未朔廿一日乙卯歸葬於大
倭國葛木下郡山君里狛井山崗天潢疏派若木分枝標英啓哲載德形仁惟卿
降誕餘慶在斯吐納參賛啓陳規位由道進榮以礼隨製錦蕃維令望攸屬鳴絃
露冕安民靜俗憬服來蘇遥荒足輔仁無驗連城折玉空泉門長悲風燭

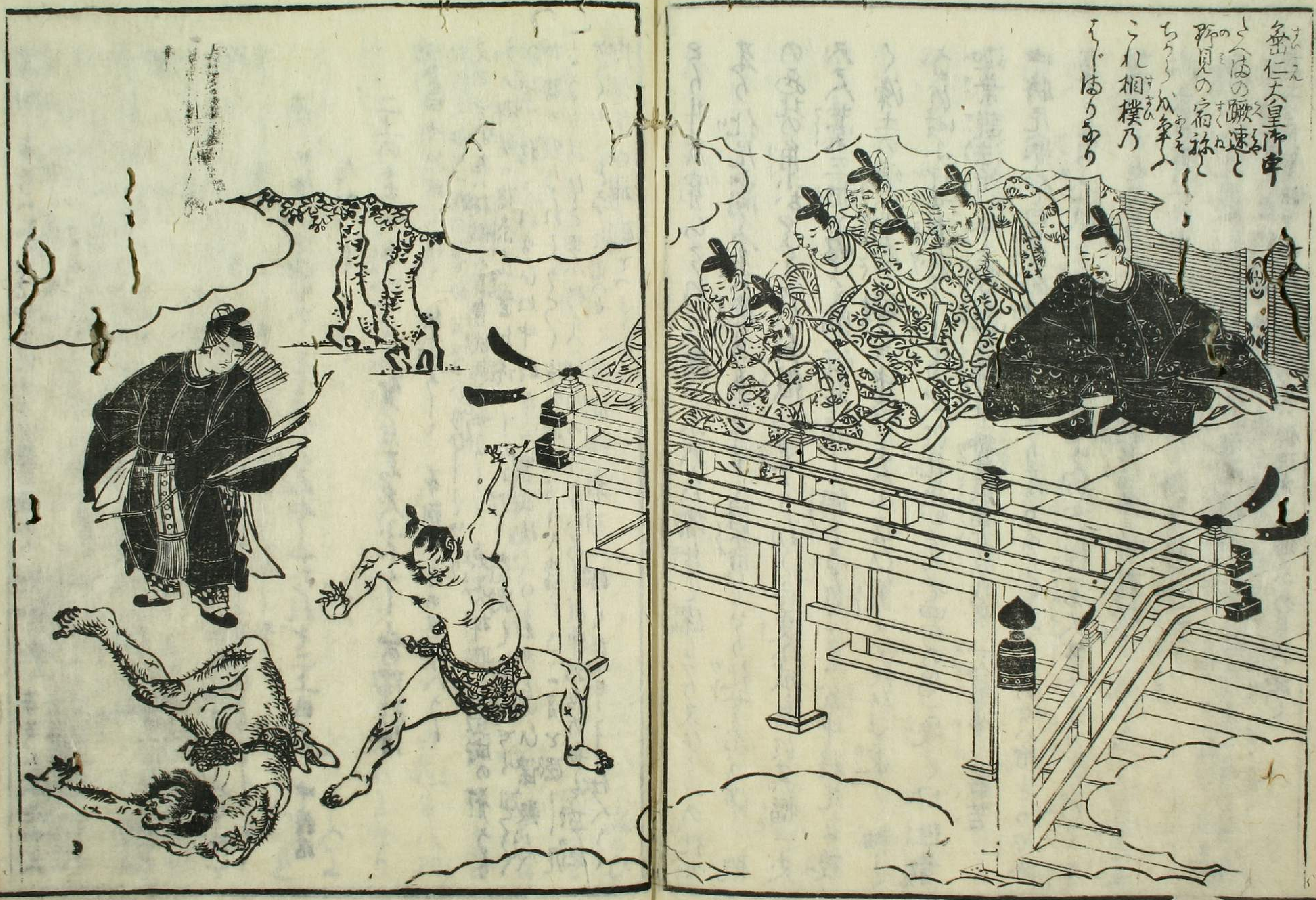
二上山 當麻村の西北にあり 河内國に跨る 二峯あり 男嶽女嶽といふ 北に小峯あり
銀峯といふ 南に瀑布あり 高一丈餘

續古今
しぐれつつ秋のあはれをつくしけり二上山に月のこるらん　家持

續後拾遺
郭公なくなる声もほのかにて二上山の夜半乃一聲　讀人しらず

當麻寺　二上嶽の東の麓にあり　二上山万法藏院禪林寺と號す本堂ハ
観世音なり曼陀羅堂ハ勅額あり是ハ新曼陀羅あり又
本堂の後の寶藏ニハ中將姫眞筆の曼陀羅を收めらる當寺ハ
用明帝第三の皇子麿古親王の御建立にて其初ハ推古帝の御宇
二十年河内國山田郷ニ造立ありて万法藏院と號を今の當麻の地
ハむかし役行者の家地也天武帝白鳳二年麿古王の御夢の告ニ依
て今の地ニ移し給ふ又天武帝役行者の地を寄附ありて行者よ
勅をうけて伽藍となし給ふ又ハ同十年十二月堂舎ことごとく成就にて日
於て禪林寺と改し給ふ其後大平寶字年中右大臣豊成公の女中將姫
此寺ニ入て尼と成一心ニ佛道ニ歸依し眞の弥陀佛をたがはんで
専ら此寺ニ出家して拝ミ給ふにある時一人の比丘尼来り語て曰我汝が為
ニ弥陀如来を顕ハしめん百駄の蓮茎を集むべし中將尼帝へ奏し
給ひて詔して蓮茎を運ばせしむ其時化尼来りて茎を折糸を

とり井に穿ちられば濯ぐに又々燦然と染上りて又ひとりの化女
来り化尼に問ふ糸ハ染上りや答て曰早成しぬとて化女糸を深く殿
の西北の角に於てこれを織初更より初て四更に成就す其幅一丈
五尺葉三把を以て油二升を浸し燭としてこれを中將尼に授
く淨土の變相悉く備ふ中將尼大に悦び節もなき竹を求て軸とし
かれは化女忽然として去ぬ化尼ハ〇て四句の偈を授て曰　往昔
迦葉說法所　今来法起作佛事　響音懇西方故我來　一入是場永離苦
中將尼問て曰吾知識ハ何くより来りたまひしぞ又かれの女ハ誰ともいへ
答て宣ハ我ハ西方の教主なり其の女ハ観音大士なりと言おハりて雲
を凌て西の方にぞ去にける中將尼是より精修すること宝亀
六年二月十四日遂に念佛して往生したまふ　年廿九才
新曼陀羅ハ大平宝字年より四百八十年を経て土御門院の御宇　建永二
年に院奏によりて後鳥羽院の御宇　保延二年十月に勅詔
を蒙り同じ〇此彼国備後に於て縫写して同年十二月廿二日に切ゐり
畫工ハ良賀法印〇〇眼　銘文ハ修理太夫藤原朝臣行能之



垂仁天皇御宇
たへまの蹶速と
野見の宿祢と
ちからゝか争ふ
これ相撲乃
はじまりなり

講堂 本尊ハ阿弥陀如来地蔵菩薩の像あり　法華堂 本尊ハ釈迦如来 安置此堂ハ
右大将頼朝公熊谷次郎直家をなまり 坊舎 真言宗十六坊浄土宗二ケ寺
として建立しめ人東西に二所あり 尼寺二ケ寺あり
紫雲庵 和州当社記曰中将姫ハ当麻寺の実ハ惟法師を師として髪をおろし給ひ
名を法如と申し給ふ 又禅尼と号して念仏し給ひ 紫雲庵ハ当麻寺の東の方
に小堂あり尼寺なり中将姫の草創 阿弥陀の来迎あらん事を
往生集云 中将姫二上山に籠居し給ひ 念仏三昧に入 寥々たる窓の前 月のひかりとし
別としせんしうに念仏し 正覚の阿弥陀来迎あらん事を
ひとり老尼一人来りて法如尼おもしろおぼしめて

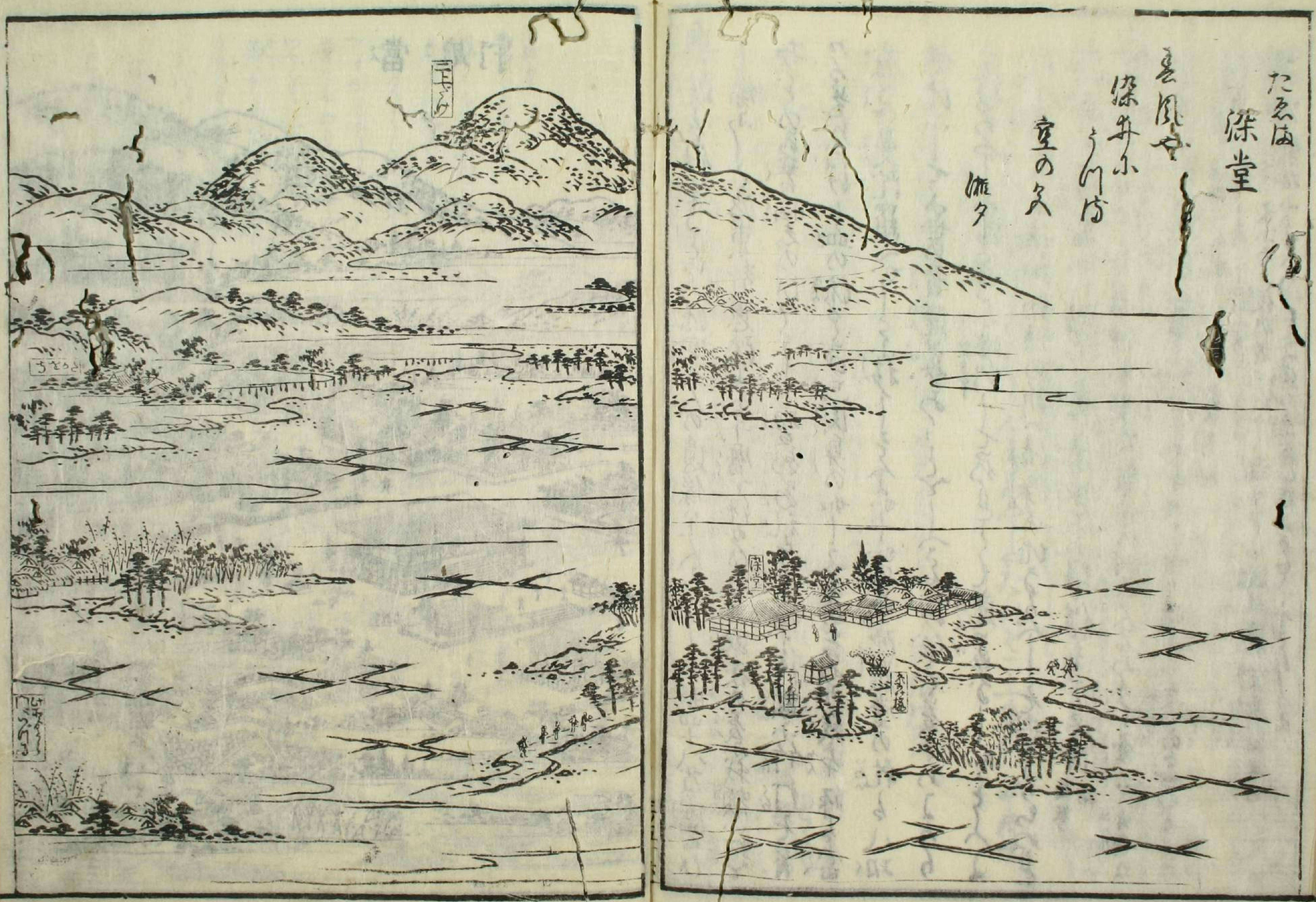
南無阿弥陀仏をのミ唱へたまふ事あやしやたれそ二上の山　中将姫

尼かへし

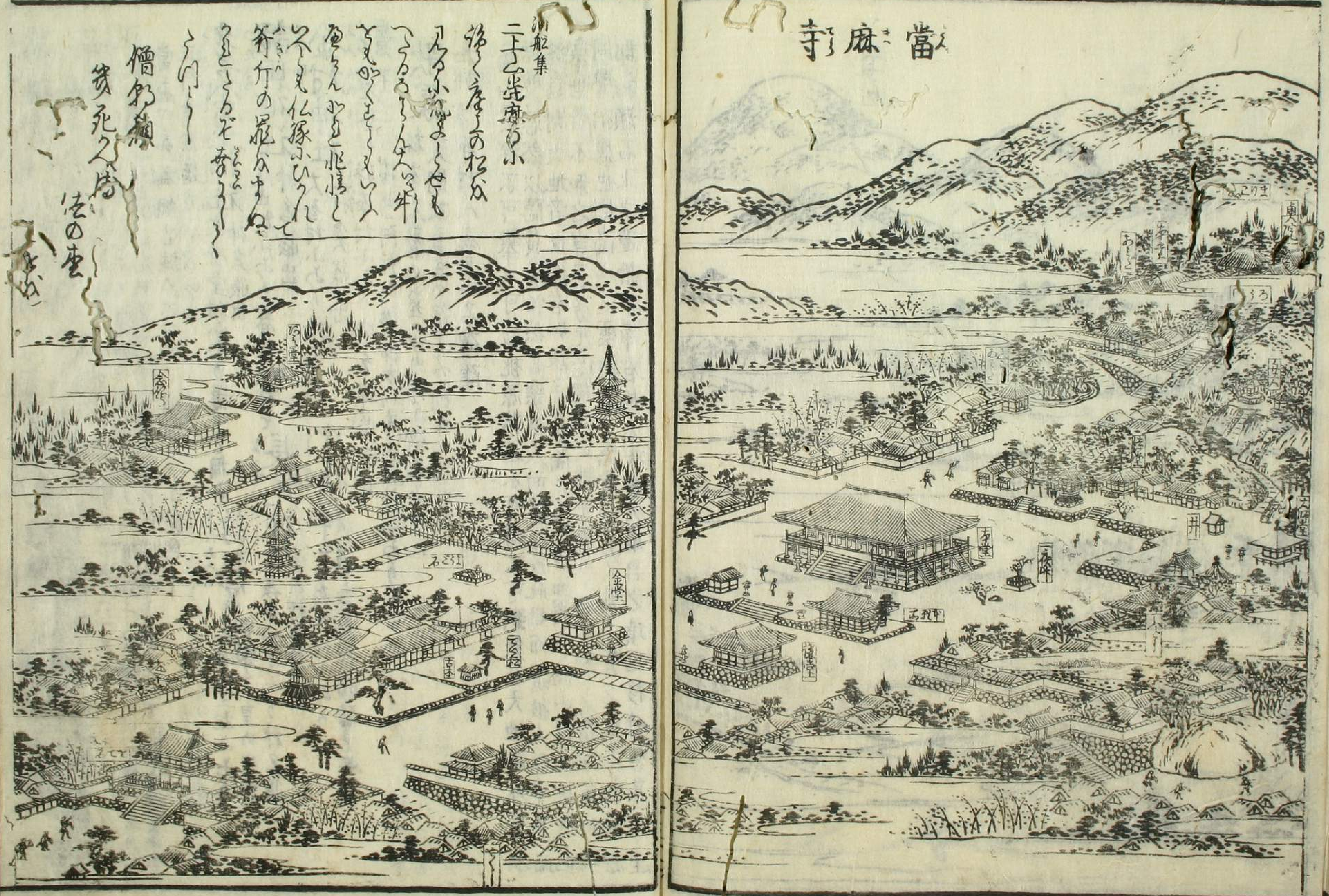
二上の雲路に出てよ人毎に極楽へるし山の端はけ

或書曰 中将姫の母ハ紀の名虎が娘なり 本朝女年の其一人なり
弘法大師此姫の筆法をおそれひしとぞ 又豊成卿の女なり
又曰 中将姫ハ横佩大臣豊成卿の女として 母ハ紀伊名虎の女
初め押勝が橋本に籠居しける時 照夜の前も豊成の女と
号す 是より中将姫ハ豊成流人の女として縁の下に籠り
押勝が姪それぞれ ありしく 当麻寺に身を隠し
として 初ひき母に仕へ 継母の讒言ありし 中将姫の母
ぞくかくよかれ 兵女ハ豊成卿の養女の後も禁中に仕へ
内侍所の神職とつとむ 云云

奥院 此住生寺といふ 源空上人の遺像ハ上人みづから開眼 四十八歳に満ちたまひ
し像にして 洛東知恩院にて年暦を経ゐたりけるが 或夜の夢に我額に竹を
おとの信者悩みのびかしと 瞻仰あれを人に誠に御額に竹釘を打て有
しと見えはけむ 血の流るゝ肉身の如し 又夢の告あり 我本師ハ当
麻寺の曼陀羅ハかしこに移しまゐらせし 当寺の曼陀羅堂の乾の八功
徳池にして世の青蓮華あらはし 此所を我が住家なり
慈悲の心を以て当麻寺に巡りして弥陀の蓮華あらはしけむとて
役小角むかし諸神勧請の所ハ清浄の地なり とて土をうがちて池と
し 此庭にまた蓮華あり則堂を建て遺像を移し往生寺と号す 西誉
石光寺 染野寺といふ 当麻寺の丑寅四町 天智帝の時に大石ありて夜々光を放
ち 染野村にあり 光を尋ね掘りしに弥勒の尊像に刻まれし本尊とせり故に石光寺の名あり
染殿井 染野寺の前にあり 蓮の糸を
染しところ
櫻樹 染寺の前にあり 役行者うへられし栽のひとく我仏法の栄衰ハ此桜の
繁枯によるべしと又蓮の糸を此桜にかけてかされし


深堂

當麻寺



海船集
二上山当麻寺に
詣て庭上の松を
見るに凡千とせも
へぬらん大いさ牛
をかくすともいふべ
けん かれ非情と
いへども仏縁にひかれて
斧斤の罪をまぬかれ
たるぞ幸にしてたつ
とし
僧朝顔
幾死かへる
法の松
金堂
講堂

高雄寺 新庄村にあり二上山 横佩墓 当麻寺より坤十町にあり 横佩右大臣豊成公は武智麿
の長男継縄は此の嫡孫正二位右大臣藤原豊成卿と号し横佩と号す
祖名はよりて……字八年に薨ず年六十二

正行寺 箸井村にあり蓮如上人の真筆あり讃に蓮如上人の讃に曰明応二年九月
十九日寫之和州葛下郡平田荘有井邑圓浄に与ふ人寺記曰文明年中
当麻の□寺為綱古城の地を以て蓮如上人に施与し
正行寺は建立をとりて

多久虫玉神社 二ヶ倉堂村にあり龍王と称す 神名帳出

浮孔宮 二ヶ倉堂村にあり 安寧天皇の皇居也

調田神社 疋田村にあり春日と称す 神名帳出

長尾神社 長尾村にあり 神名帳 三代実録出

金村神社 大屋村にあり神名帳 三代実録出

宇佐神社 花内村にあり 二葉山八幡宮と号す

影現寺 柿本村にあり宗名禅黄檗派
本尊阿弥陀仏 柿本祠本堂の傍にあり

歌塚 柿本人麿の墓あり傍に碑石あり
碑文則林直民の撰なり 跡之

和州柿本村人麻呂小石碑陰

商山雲深不可攀不可陟桃源路迷不可遊不可到然非天地之外是以
皓叟悠然以隠黄髪怡然自樂彼人而遺此世此世而遺彼人故車馬跡
絶爲別大地者也偶有如張子房陶元亮者而得向商山得游桃源也
舉世皆不知之豈子房元亮獨知之哉出塵之操與潔之情同氣相求
同聲相應也則商山之雲桃源之路豈必背人哉人背之也大和國葛下
郡初瀬石上之邊柳本寺有柳本大夫人麻呂之墳世移時替基趾湮
滅曽聞藤清輔尋其旧蹟刻小碑詠歌而去其後鴨長明尋之不得矣
問歌墳在何處而始知之人麻呂者歌林之仙獨歩絶倫者也清輔長明者
千歳之同士也試心所求豈不至乎哉猶子房元亮於商山桃源也和州郡
山城主日州太守源君信之一日語余曰其領内葛下郡柳本村有人麻呂
之墳土人傳稱人麻呂生于茲故後人建墓也蓋其自歌墳所移葬乎今
已荒廢僅存旧礎是以修其寺院建小石欲垂不朽也請記其事太守
初鎮播州明石城浦畔以有人麻呂祠堂建碑請詞於我先人弘文学
士詳記履歴今又修其墳墓可謂能知人麻呂者也自然之好因不亦
奇乎嚮雖有清輔長明然不遇太守起廢之舉則誰向其跡尋其風哉
明石不遠朝霧接影人麻呂之霄息于此遊于彼長濟千歳之美也亦
是太守追遠之一端乎其於事業則民徳帰厚者可以期焉乃誌于碑
陰為後證

天和元年辛酉十月中旬

整宇林戇直民甫識

笛吹山 忍海郡の西界にあり巨樹鬱然し 風雨の時に
笙の音あり山中に祠あり

栗栖小野 柳原村にあり
山城にも同名あり

新續古今
つれ渡せんとの菜摘へてありにかりくるさにあそれて萩の焼原 権中納言長方

新續古今
吉野秋原にの篠の色にくるを知りに見分へてとどろの錦なりらん 権中納言雅縁

葛城川 葛下郡に入 堺十三村に分流す

笛吹祠 笛吹村にあり

為志神社 林堂村にあり 神名帳出

火雷神社 笛吹村にあり 神名帳出 十二所権現と称す

角刺宮旧址　忍海村にあり人皇廿二代清寧天皇五年崩じ給ひて皇太子
億計王と弘計王と互に御位をゆづりあらそひ給ひしかば帝位も
あまた年御妹飯豊青皇女忍海角刺宮にして政をしめひて
ミかど忍海尊と名づけ給ひ世に崇つかうまつる　日本紀に此皇女を
清寧帝三年七月角刺宮にして與夫初交ありしが人に語りのたまはく
一たび女の道をしりぬれば何の異なることかあらんその後交合の道
ねがひ給はずとなん　日本紀

遊岡　笛吹村にあり

笛吹池　笛吹村にあり

清水　今城村にあり清澄し

古今六帖
吹笛の社の神もあそぶらし遊の岡やり深かりしん
笛吹の池の堤は遠くとも落ちくるばかり花さくらん　読人しらず

朱櫻　笛吹山にあり此樹の皮を剥とり卜部灼亀に例有之
袖中抄にみえたり

大和名所圖會巻之三　終